

ふるさと

旭



はじめに

わたし達はわたし達のふるさとを愛し、ふるさとの発展をねがっています。

比較的便利で自然にも恵まれた美しいふるさと旭村に生れ育はぐまれていることを誇りにしています。

このふるさとの歩みをたずね、ふるさとの姿を見直すことによって、皆さん方に旭村に対する理解をより深め、このふるさとへの愛着をより大にして戴きたいと考え、旭村教育委員会にお願いして前明木中学校長、大森行雄先生をはじめ諸先生方のお力によって、学校の児童、生徒にもわかり易いようにこの「ふるさと旭」を編さんして戴きました。

この美しいふるさと旭村を更に住みよい明るい旭村にしてゆくのはわたし達のつとめであり、そのことが永年にわたつてこのふるさとを育ててこられた多くの先賢のご恩に報ゆる道でもあります。そのためにもこの書によつて、ふるさとを知って戴きたいと思ひます。

わたし達のふるさとをふりかえつてみるのですが、これからの村づくりにつながることをねがって、旭村発足三十周年記念誌としてこの「ふるさと旭」を編さんしました。

ここにふるさと旭村の将来の発展を祈念しつゝ、この編さんにあたられた方々並びに種々ご協力を戴いた多くの皆さま方に心より謝意を表して序といたします。

昭和六十年四月一日

旭村長 大石 博英

凡 例

- 一 本書の資料は、主として、旭村史（昭和五十三年 旭村役場編）、佐々並村史（昭和三十年 佐々並村史編纂委員会）によった。
- 二 元号年数は、できるだけ西暦紀年を（ ）で記入した。
- 三 文中の人物については、特別な場合を除いて、すべて敬称を略した。
- 四 出典は、その都度文中に記入するように努めたが、わかりやすくするために、「防長地下上申」を「一七四〇年頃の記録」「防長風土注進案」を「一八四五年頃の記録」とした。
- 五 引用のうち、難解なものについては、口語文になおした。
- 六 特殊な読みや、難しい漢字には、ふりがなをつけた。
- 七 写真は、編集委員が、昭和五十八年十二月から昭和五十九年三月の間に撮影したものである。なお、地下上申絵図、公儀所日乗、有故雑文の写真は、山口県文書館の許可を得て、同館の資料を撮影して掲載した。

目次

第一章 萩往還	1
一 鹿背坂茶屋跡	1
二 烏帽子岩	2
三 明木市・佐々並市	3
四 一升谷	7
五 茶屋	8
六 街道松	9
七 一里塚	10
八 夏木原口屋と国境碑	11
九 萩往還の復元	11
第二章 幕末・維新と旭村	12
一 殉難三士	12
二 旭村における町田騒動と萩の乱	14
三 狼煙場 <small>のろしほ</small>	18
四 松陰東送の碑	20

第三章 村の生活

一 キリシタンと仁左衛門

二 天保の一揆

三 年中行事

四 交通

五 石風呂

六 力石

第四章 産業

一 石灰・銅・銀

二 魚切りの水路

三 宗哲井手

四 揚水車

五 製氷

六 舞谷障子

七 矢代のくわぶろ

八 佐々並豆腐

九 彦六まんじゅう

21

22

23

24

29

31

32

32

32

35

36

37

38

39

39

40

41

第五章 学校

一 学校制度……………42

二 学校の統合……………43

三 学校生活……………45

第六章 民間信仰……………52

一 庚申様……………52

二 荒神様……………53

三 道祖神……………53

四 火除様……………54

五 水神様……………54

六 正堂様……………55

七 鍾馗様……………55

八 隠れ地蔵……………56

九 石仏様……………57

十 白口弘法大師……………57

十一 不動明王……………58

十二 大番様……………59

十三 逆修石……………60

第七章 神社にまつわる伝説……………62

一 貴布祢神社(明木)……………62

二 六所神社……………63

第八章 民話……………65

一 彦六・又十郎物語……………65

二 木村源内の化物退治……………68

三 弥三郎きつね……………71

四 首切れ地蔵……………73

五 淵が平の滝……………76

第九章 方言……………77

一 一般的な方言……………78

二 訛音語彙……………95

三 特殊な修辭的語彙……………101

参考資料

一 地名の由来……………110

○ 二 人口の推移……………113

三 地形断面図……………115



第一章 萩往還

歴史の道、萩往還。それは、毛利氏が萩に築城をはじめた慶長九年（一六〇四）から、明治の中頃までの約三百年の間、萩と三田尻を結ぶ基幹路線として重要な役割を果たした。あるときの参勤では、千六百人を越す大行列が通り、あるときは、江戸からの飛脚が一人で駆け抜けた。そして、幕末から維新にかけては、多くの志士たちが、江戸へ、あるいは京へと足早やに通り過ぎて行つた。それから百年。今、一升谷に残された石畳が、わずかに往時を偲ばせてくれる。

往還は、殿様のために造られた道である。だが、それは、庶民の道でもあつた。三百年の間、旭の里で暮したわたしたちの祖先の喜びや悲しみを、地面深く秘めている道である。想いを四百年の昔に馳せて、この道をたどってみよう。

一 鹿背坂茶屋跡

鹿背坂トンネルの上に、トンネルを横切るようにして、茶屋跡がある。現在は杉林で、あたりは、うつ蒼としてゐるが、昔は草地で、ある程度の展望もきいたであらう。

ここに、長さ六メートル、幅二・七メートルの、土俵半分ぐらいの盛土をした御駕籠建場と、茶屋があつた。往時



村境碑

二 烏帽子岩

茶屋跡から、急な坂道を下ると、トンネルを出た所の県道に出る。そこから、往還復元工事で修復された道を谷筋にそって三百五十メートルばかり下った道の右側に、烏帽子岩がある。先のとがった、ごくありふれた岩であるが、一七四〇年頃の地図や記録に、「烏帽子岩」「えぼし岩」と記入されていることから、自然の道しるべとなっていたと思われる。岩の後方の杉林に、昔は地藏さんがあり、その前が広場となっていて、休憩できた。殉難三士のうち、香川半介と冷泉五郎の首を、この烏帽子岩の所でさらしたと伝えられている。

をしのばせる石垣が残っている。山の斜面にくつつくようにして低い石垣があるが、ここは、湯わかし所か水飲み場だったのだろう。広場の端に萩市との境を示す明木村と刻まれた標石がある。なお、用語についてであるが、御茶屋は、殿様の休憩施設、御駕籠建場は、殿様の休憩場所、茶屋は庶民の休憩場所だったので、この茶屋跡は正式には、御駕籠建場跡となる。



烏帽子岩



明木市付近 (地下上申絵図)

三 明木市・佐々並市

萩往還の完成とともに、明木市も佐々並市も宿場町として、また、市の町（商店の並ぶ町）として栄えた。両市の家並は、現在とほとんど同じであったが、明木市は、明治二十四年の大火で焼失して新しく建てられたし、佐々並市も、ほとんどの家が改築されているので、その面影をとどめていない。

一八四五年頃の記録によると、両市は次のようであった。

(一) 戸数

明木市 七十三軒（商人二十軒 宿人夫馬持 五十三軒）
 佐々並市 六十二軒（商人十五軒 宿人夫馬持 四十七軒）
 商人、宿人夫（人や荷物を選ぶ人）とも、農業に従事していた。

(二) 御茶屋

佐々並市には、御茶屋があった。現在の佐々並農業協同組合



佐々並市付近 (地下上申絵図)

木材部、旧佐々並小学校の敷地内に、長松寺の前身である長松庵があった。毛利輝元が、萩へ移転する際にここで休息したといわれる。それにちなんで、御茶屋が建てられたと伝えられている。

御茶屋は、六百七十平方メートルの広さがあって、本館、御長屋門、御蔵、御供中腰掛おとしちゆうこしかけ、仮御馬立二か所、それに御番所があった。後年、往来の通行がひんばんになると、宿泊施設が不足して、御客屋が設けられて、木村作兵衛宅は役場の隣りに、井本弥八宅はその向い側にあった。

明木市には初め、御客屋と呼ばれる休憩所的なものがあったが、後に増築されて宿泊施設をととのえた。明木郵便局隣の佐々木家辺りにあったといわれる。また、御用屋敷と呼ばれる御茶屋の補助施設があり、原善助宅が建てられた。

明木市の宿泊施設が、だんだん増設されたのは、安政年間のことである。急を告げる幕末を迎え、人の往来が一段と激しくなったためであろう。そういえば、吉田松陰が、武蔵野むさしのの露と消えたのも安政の大獄たいごくであった。

○吉田松陰と金子重之助の護送最後の宿

吉田松陰と金子重之助が、伊豆の下田で、当時最も堅く禁じられていた密航を企て、アメリカ船に乗船しながらも、国交のないことから断られ、失意のうちに捕われの身となって、萩へ送り返されることになった。二人を乗せたふたつの唐丸龍は、江戸の毛利藩邸の死がい捨る不浄口である黒門から、追い出されるように国元へ護送された。道中、重之助はひどい下痢に悩まされた。下痢がひどいといっても、そのたびに龍から出してはくれない。たれながしてである。着物は汚れ放題、龍には異臭がたちこめた。宿舎に着いても、龍に入れられたままで土間に置かれ、夜着一つ与えられなかった。晩秋の冷えこみは身にこたえる。重之助の命がもつだろうか。松陰は心配だった。二十人にもおよぶ藩の役人や番卒のうち、一人としていたわりの心をもちあわせていないらしい。松陰が、役人に抗議しても一向にとりあげない。ついに松陰は、自分の着ている羽織を脱いで龍の外に投げ、「これを重之助に着せてやれ。」と番卒を叱りつけた。そして、

「重之助の手当てを十分にしないのなら、私は絶食するぞ。」と役人に強く抗議した。

師弟愛、人間愛を痛いほど感じさせる松陰の言動である。こうして、江戸から三百里、一か月に及ぶ長く苦しい旅の最後の夜を、明木で過ごした。(重之助は重輔とも書く。松陰全書では、重之助(重輔)となっている。)

(三) 宿駅

宿駅は、人・荷物・御用状などの輸送をした所で、目代と呼ばれる役人がいて、人馬や駕籠の調達、賃金の徴収をした。明木には、人夫十九人と馬三十頭が配置され、市のなかほどの大玉家あたりにあったと伝えられている。佐々並には、人夫十七人と馬三十頭が配置され、市の現在の小林商店の所にあった。

(四) 高札場こうさつば

幕府や藩の御触れおふ（法令や規則など）を掲示する場所。大きさは、明木も佐々並も大体同じであつた。明木の場合を例にとると、長さ六・三メートル、幅一・八メートル、高さ〇・九メートルの土塁を石垣で囲み、その上に板葺屋根のついた長さ五・四メートルの掲示板が、四本の柱に支えられて立っていた。

「慶安の御触書おふれがき（一六四九）」を例にとると、次のようなことが書かれていた。

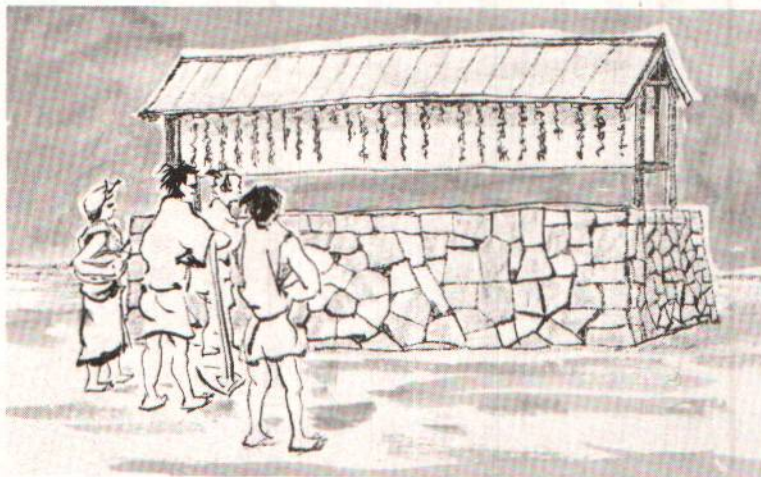
- 一 百姓は、酒、茶を買つて飲んではいけない。
- 一 百姓は、麦、粟、ひえ、菜、大根その他どんなものでもよいから雑穀を作つて、お米をたくさん食べないようにすること。

一 百姓の衣類は、もめんだけとする。帯や着物の裏に、絹などをつかつてはならない。

さらに、藩の御触れ（郡中制法 万治三年 一六六〇年）の中には、

「百姓として、直参じきさんの諸士に不心得をしてはならない。少々杖つえを受けても堪忍し、事情は追つて郡奉行官に訴え出ること。はむかつた場合は、百姓の方が悪い。右の事情を調べ、諸士に非があれば、その程度によつて法を行い、百姓に落度があれば、これを重罪とする。道で直参の武士や他国の乗馬の武士に出会つたら、必ず下馬すること。」といったようなことが書かれている。

高札場は、明木では最初、西来寺側から橋を渡つて左側にあつたが、後に、堂尾のあたりに移された。佐々並では、久年側から市橋を渡つて左側にあつた。現



在は河川敷になっている。

その他の公共施設としては、御米蔵とその番小屋があった。明木では蔵屋に、佐々並では宮の川にあった。

四 一升谷

明木農業協同組合の前に、「右せき道左山口道 千時慶応三ヶ卯歳建之（一八六七年）」という道標がある。一七四〇年頃の地図によると、道の分岐点は堂尾になっているので、この道標は、何度かの道路改修で移転されてここにきたと思われる。堂尾には、萩から二里（約八キロ）、赤間関から十七里（約六十八キロ）を示す一里塚もあった。

堂尾を過ぎると道は茶屋川にそって、往還の面影を最もよくとどめている一升谷に入る。一升谷は、新切まで約二キロの上り坂道で、昔から、あまり急な坂道のために、この坂道にとりかかって炒豆いりまめを食べはじめると、坂を登りきるまでにちょうど一升なくなることから、このように呼ばれたといわれている。

山間に入って、道の左側に田圃でんぼがあり、しばらく歩くと、道の左側に幅約一メートル、長さ約四十メートルにわたって石畳がある。このような石畳が、



一升谷の石畳

鉦切まで数か所ある。

四百年の風雪に耐えた石畳である。わたしたちの祖先の汗の結晶である。そしてまた、何千何万という人が、いろいろの思いをこめて踏んで行った石畳である。ずっしりと重い歴史を感じずにはおられない。

石畳を過ぎてしばらく進むと、左側に、町田梅之進自刃之地がある。そして、その奥まった所に、「東京行司木村久治墓」と書かれた墓石がある。東京、行司、木村となにかいわれがありそうだが、はっきりした言い伝えがない。

五 茶 屋



桜茶屋 右の小屋の所が御駕籠建場跡



上の茶屋跡

殿様の途中休憩場所としては、規模の大きい茶屋が鉦切にあった。ここのお茶は、塩づけされた八重桜だったことから、「桜の茶屋」と呼ばれた。佐々並に向って道路右側の河村宅が、最初に始めた「下の茶屋」である。道路向いの小高い所が、御駕籠建場跡である。

御駕籠建場は、道との境を柴垣しばがきで区切り、駕籠すえ台二基と仮設便所があった。藩士と足軽の休憩小屋二棟と湯茶所が、柴垣の外に設けられていた。「殿様がお着きになると、ここから湯茶を運んだ。」と河

村さんの家に言い伝えられていることから、湯茶所が河村さん宅と思われる。家のそばに桜の切り株が残っていて、大師像があったと思われる祠がある。少し登って行くと、道の右側に立派な石垣に囲まれた畑がある。ここに、「上の茶屋」があった。今はその向い側になっている田村宅である。

旭村内には、このほか数軒の茶屋があった。夏木原の茶屋は、夏になると一の坂との中間にあたる「きんちぢみの清水」に掛茶屋を出し、ところてんを馳走した。そのところてんは、冷たい水で冷やされていて、食べると、きんちぢまがちぢむということから、「きんちぢみのところてん」と呼ばれ名物となっていた。

久年焼石の茶屋は、「三平まんじゅう」で有名だった。そのほか、板橋に小坂茶屋、お仲茶屋などがあった。

六 街道松



松 涙

街道松は、防風や日陰など旅人の保護のため、あるいは、敵が攻めて来たとき、切り倒して敵の進撃をおくらせるために植えられたといわれている。その歴史は遠く天平年間（七二九〜七四八）にさかのぼるが、今残っている松や杉は、慶長年間（一五九六〜一六一四）以降のものである。

最初は、一・ハメートル間隔に道の両側に植えられ、田畑のあるところはもっと広い間隔だった。明治になってからも植え継がれたが、大風で倒れたり、国道建設のためや、田畑

の陰になるため、あるいは用材用として、切られて、今では旭村内から姿を消した。

街道松で有名なのは、萩の「涙松」であろう。

かえらじと思いきだめし旅なればひとしおぬぬる涙松かな

安政の大獄のおり籠で江戸へ送られる松陰が、

「これが萩の見じまひなれば、一寸ちよと見せてくれ。」といって詠んだ歌である。

江戸へおもむく藩士が、萩の城下町の見納めみおきの場所であるここにさしかかったとき、今一度ふり返って惜別せきべつの情に涙し、また、江戸から帰ったとき、うれしさに涙した姿を、ここの松は幾度見たことであろう。

江戸へ行くには、萩から三田尻まで徒歩、三田尻から大阪までは、最初は水路によっていたが、享保十年（一七二五）頃から陸路も利用されるようになった。大阪から江戸までは陸路であった。

七 一里塚

一里塚は、ある基点から一里（約四キロ）ごとにつくられた築山で、中央に木製の柱が立てられ、道順と距離を示した。萩が藩政の中心となってからは、唐樋札場が基点となった。萩から順にたどると、萩市悴坂かせがさか一里塚、旭村内に入つて、堂尾、横瀬山下（これは赤間関往還）、新切中の峠、市頭いちがしら、上長瀬にあった。上長瀬一里塚は、原形に近い形で残っていて、県指定史跡となっている。この塚は、萩から五里、三田尻船場から七里を示した。



上長瀬の一里塚

八 夏木原口屋こやと国境碑



国境碑

夏木原に口屋があった。口屋は、通行人の取締りや警戒にあたる所で、関所の小さいものと考えればよからう。萩の入口にあたる大屋にもあった。口屋では、口屋銭といって、一種の通行税をとっていた。明木に伝わる彦六・又十郎の物語もこの通行税にまつわる話であることから推測すると、ずいぶん農民を苦しめたことがわかる。

夏木原を過ぎて板堂峠を登って行くと、道路の左手上方に国境碑がある。碑には「南 周防国吉敷郡 北 長門国阿武郡 文化五年（一

八〇八）戊辰一月建之」と刻まれている。

九 萩往還の復元

文化庁は、旧街道の整備保存事業として、奥の細道、中仙道、熊野参詣道について、全国で四番目に萩往還を指定した。旭村は、これを受けて、昭和五十七年度から四か年継続事業として、初年度に、板橋地区、千持峠二か所、五十八年度に、夏木原く国境碑間、鹿背坂く原間、五十九年度に、千持峠く落合間、一升谷二か所、六十年年度に、落合新茶屋間、新切竹林公園裏側の整備、及び案内板の設置、一里塚の復元等にとりくんでいる。

第二章 幕末・維新と旭村

一 殉難三士^{じゆんなん}

幕末の頃、毛利藩は、幕府の長州征伐やイギリス、フランス、アメリカ、オランダの四国連合軍の下関攻撃への対応をめぐって、⁽¹⁾俗論派と正義派に分かれてはげしく対立していた。⁽²⁾俗論派が、正義派を圧して藩政を行うようになる

と、これを不満とする高杉晋作が、正義派の諸隊⁽³⁾に呼びかけて蜂起し、大田・絵堂の戦いで俗論派の藩軍を破り、山口に本拠をかまえた。

このとき、藩軍は前軍を絵堂に、中軍を明木に、そして後軍を三隅に布陣した。絵堂の戦いで諸隊に破れた前軍は、明木の横瀬まで退却した。一方、山口に移った正義派の諸隊の一部は、佐々並に進撃し、ここでも藩軍を破り明木に退却させた。

この頃萩では、高杉らの諸隊に賛同する藩士が結束して、鎮静会議員を名乗り、諸隊との和平を進めようとした。この時、和平交渉の使者として



殉難三士の碑

(大正三年四月 明木青年会員建立)



権現原の地藏

選ばれたのが、香川半介（三十五歳）、桜井三木三（三十六歳）、冷泉五郎（二十五歳）、江木清治郎の四名である。彼らは二月十日、山口の諸隊を訪れ、藩主の意向を伝えるとともに、萩に突入しないように説得した。

藩軍の中には、藩軍に批判的な鎮静会議員による和平交渉に反対する者がいた。彼らは、事前協議もなしに勝手に交渉に行った四人の使者に激怒し、使者の帰りを明木の権現原で待ち伏せして、香川、桜井、冷泉を殺害し、江木に深手を負わせた。江木は傷を負いながらも、笛吹―洗い谷―惣江―河内―大屋を通過して萩に帰り着いた。時に慶応元年（一八六五）二月十二日であった。

その後、和平が成立して、正義派も藩政府員に加わり、挙藩一致の態勢ができた。このとき、俗論派の児玉吉郎、冷泉太郎兵衛ら七名が、三士殺害の犯人として捕えられ、野山獄で切腹させられた。

- (1) 俗論派の主張 一意恭順……ひたすら幕府に謝罪して、藩の存続をはかろうとする。
 - (2) 正義派の主張 武備恭順……条件によっては、一戦も辞さない態度で折衝しようという。
 - (3) 諸 隊 御楯隊、奇兵隊、唐懲隊、八幡隊など。
 - (4) 藩主の意向 俗論政府下で捕えられた旧政府要員の処分を寛大に扱う。人事の刷新をすみやかに行う。
- （旭村史より要約）

権現原の地藏と殉難三士の関係について

この地藏は、三士殉難の地に、三士の冥福を祈って建立されたといわ

れている。また、明木川が権現原でいつも氾濫はんらんするので、田畑を水害から守るために建立されたともいわれている。二つの言い伝えについて考えてみよう。

かつて、往還は川に沿ってこの地蔵のそばを通っていた。山口から帰って来た三士らが、権現原にさしかかったとき、地蔵のかみにある土橋の下にかくれていた刺客に突然襲われ、格闘がこのあたりで展開され、三士は一人二人と倒れていった。地蔵は、三士殉難以前からここにあり、このことがあってからは、三士の冥福を祈る地蔵ともなったのではなからうか。

地蔵のそばにある石燈籠いしとうろうには、「奉獻 明治十二年（一八七九）七月二十四日 岡政介 中谷金槌 齊藤清太 内村勇吉 吉岡市熊」と刻まれている。地蔵と石燈籠が、一緒につくられたのなら、この推理はあたらない。

二 旭村における町田騒動と萩の乱

町田梅之進

町田梅之進は、はじめ、鎮静会議員として活躍したが、後に馬関攘夷ばかんじょういでは、藩の先鋒隊せんぽうたいとして藩主の護衛にあたり、幕府の長州征討では、干城隊に属して広島方面に出陣した。そして、戊辰げしんの役では、干城隊書記兼駆引役として越後の柏崎まで進撃し、胸部に戦傷を受けた。明治二年（一八六九）、藩命により、東京に留学してフランス兵学を学んで、同四年帰萩した。

明治九年（一八七六）十月、熊本の神風連、筑前の秋月の乱こおに呼応して、新政府に反省を求めようとした前原一誠



碑は昭和五十二年百年忌に建立された。

をリーダーとする萩の乱に加わり、禁固十年の刑に処せられた。

自宅の土蔵で刑に服していたが、新政府の施策を不満とする同志と、ひそかに連絡をとっていた。九州の西郷党の動きを聞いて、じつとしておれなくなり、明治十年五月三十日、萩・阿武地区の同志と、新政府の施策を正すために、山口県庁を襲い、西郷党と合体しようとして決起の準備をした。ところが、密告者のために警察に捕えられてしまった。その夜、血気にはやる同志が警察を襲い、町田を連れ出した。そして、警察に火を放って出陣の合図とした。しかし、この時、すでに夜でもあり、遠隔地えんかくちの同志への連絡が十分とれず、二百名の集合予定が、実人員はその半数にも満たなかった。その夜おそく、同志は明木駅を本陣として、軍資金の調達を始め、戸長滝口吉良宅に放火した。

五月三十一日、県庁軍と町田の同志は、佐々並で出会い相対したが、六月一日になると、県庁軍は明木まで進んだ。

優勢に進撃した県庁軍だったが、巡查や県庁職員の混成軍のため、なれない山道の行軍で隊員の疲労がはげしく、一升谷のたて樋に着いた時、すでに午後三時でもあり、野営の準備を始めた。

その時、突然町田隊が鉄砲を撃ちながら進撃して来た。ふいをつかれた県庁軍は、あわてふためき、大多数の隊員は山の中に逃げてしまった。隊長の秋良貞臣は、残ったわずか五・六名をまとめて山手に引きあげ、樹木を楯たてとして防戦した。

町田隊は勢いに乗って進撃し、町田梅之進自ら陣頭に立ち、大声をあげながら、秋良めがけて肉迫した。秋良はこれに対して、短銃で応戦した。数発撃った弾のうち、二発が町田の腰にあたった。山に登って秋良に迫ることのできなくなった町田は、道の真中に直立し、「刀を抜いて決戦せよ。」とつめよった。

秋良は、町田まで数歩の所に進み、短銃の引き金をひいた。弾は、町田の右こめかみに命中した。そのため、町田は、もはやこれまでと、同志に支えられて、行司の墓の所まで下つて、刀を自らの喉のどに立てて自害した。行年三十歳であつた。

なお、県庁軍の隊長秋良貞臣は、その後県庁を退き、防府で塩田事業に取り組み、防府塩田のもといをつくつた。

町田党放火のこと

明治十年（一八七七）五月三十日、明木に着いた町田党は、その夜十時頃、戸長滝口吉良宅に放火した。そのいきさつについて、元村長児玉勇氏は、「萩の変の記」に次のように書いている。

町田の同志田中圓亮なる者が、夕方配下数名を連れて来て、目をぎらぎらさせて、

「今の政府のやり方はなつちよらん。官吏かんりのやつらは、私腹を肥やすことしか考えちよらん。このままでは、日本はまた昔にもどる。わしらは、今から兵を起こして県庁を襲撃して官吏を反省させる。ついては、兵器や軍資金がいるので、寄付を頼む。」と荒々しく言った。夜のことでもあるし、

「米なら少々はある。」と言ってやったが、配下の者が、

「けちけちするな。けびると家をひっくりかえすぞ。」と叫んで、大黒柱にかけてあつた引き綱（昔、家を新築したときに、棟木を釣り上げた大きなわら縄）をとって、柱にきびつて、五・六人の者が引つ張りだした。

そばで見ていた滝口家の使用人の田中某（田中又五郎の父）が、すわ大変と鎌をもってその縄をぶち切つたので、引つ張っていた配下の者どもは、ひっくりかえつて尻餅しりもちをつく者や、池にはまった者もあつて、おかしかつたが、笑

われもしなかった。もとより五・六人で、建ててある大黒柱が倒れるはずがない。それがわからないほど、彼等は血迷っていたと思われる。

おこるまいことか、その連中どもが、

「こん畜生、ぶつ殺せ。」と抜刀して追いかけたが、そこは地の利に詳しい田中某、しかも、闇にまぎれて姿を消して無事息災。

この腹いせに、田中圓亮の配下の手によって放火の災難をうけた、と滝口吉良が児玉張三（児玉勇の祖父）の案内で、川上村に逃がれる時話したということである。

萩の乱と旭村

町田梅之進が亡くなった一年前の、明治九年（一八七六）十月十七日に、「萩の乱」といわれる前原騒動があった。前原党は、旧明倫館を占拠して決起し、沖原製造所から小銃・弾薬を奪い、山口へと進撃した。途中、佐々並の板橋で、多量の兵器をもつ官軍の迎撃にあい、次第に後退して萩に押し返された。この時のことについて児玉勇氏は、「萩の変の記」で次のように述べている。

当時、二十歳であった中谷タツ女（明木上市中谷秀作の養母、安政三年、一八五六年生れ）の口伝に曰く。

二十六日夜から二十七・八日にかけて、明木駅に陣羽織、あるいはたすきがけ、股引き、きやはん、わらじ姿の旧武士とおぼしき人達が急増した。駅はてんでこまいとなり、附近の人が手伝いに徴用され、事の様子はほぼ承知した。中には鉄砲を持った人もいたが、刀を差して、たすきがけの人がほとんどであった。

また、児玉みち女（児玉勇の祖母、文久元年、一八六一年生れ、当時十六歳）は、次のように話していた。

自宅が明木野地にあつて、二十七・八日の朝起きてみれば、蔵屋・野地あたりの田の中にあるとしゃく（積みわら）の陰に、三々五々、黒い洋服（軍衣）を着て鉄砲を持った兵隊が、隠れているのを目撃したので、ぶつそうてならなかつた。別に撃ち合いの音はなかつたが、二十九日頃からは、敵味方はよくわからなかつたが、負傷者が、中には戸板に乗せられて、一升谷を経て瑞光寺にたくさん運ばれるのを見た。

三十日は、激戦の様子がかがわれたので、市・牛地・笛吹・蔵屋・権現原の住人は、横瀬・角力場や川上方面に逃げて、事変のとばっちりを避けた。

三 狼煙場のろしば

狼煙場は、宿駅ができる前に、藩主が江戸へ向かわれることや、江戸から帰られたことなどを知らせるために設けられた。しかし、実際にはあまり活用されなかつたらしい。

ところが、ペリー来航より六十二年前の寛政三年（一七九一）七月、異国船（ロシア、イギリス船などで、朝鮮、中国、オランダの船は、ふくまなかつた）が、下関沖から北浦沖を航行したために、幕府は、大急ぎで沿岸の警備体制を整えるように各藩に指令を出した。これを受けて毛利藩は、寛政五年（一七九三）、緊急連絡方法として、狼煙場を再編成した。

旭村は、萩への連絡路線の要かなめとして、次の二つの線が通ることになった。

(一) 三田尻・萩線 防府の桑の山で最初ののろしがあがると、山口市内の四つの山を経て、佐々並の鼓つづみがたけが獄、岩城



石の巷山山頂の狼煙場跡と伝えられる「馬の足跡・赤子の足跡」の岩

山、明木の方ヶ嶽・いすの子峯を経て萩に至る。

(二) 赤間関・萩線 下関市長府の領火の山から、美祢市、秋芳町、美東町の絵堂を経て、明木の雲雀山ひばりやま、いすの子嶽で三田尻線と合流した。

地下上申絵図に記入されている狼煙場と、防長風土注進案に記載されている説明文、国土地理院の地形図を総合してみると、鼓が嶽は現在の狼山（山口市域）、岩城山は日南瀬峠（日南瀬から舞谷へ越す峠）の西側の山、方ヶ嶽は現在の野丸岳（野丸岳のことを、一八四五年頃、明木では方ヶ嶽、佐々並では野丸ヶ嶽と呼んでいた。）ではないかと思われる。なお、将来の考証が期待される。いすの子嶽は、石の巷山いすのこのことである。この山へは、洗谷を上って七曲りを通り、馬立場まで馬で登り、そこから徒歩で行ったと伝えられている。

また、このほかに、鉾切の高焼山（国道をはさんで、野丸岳の反対側の山）も、地下上申絵図に狼煙場として記載されている。

のろしによる連絡方法

のろしを見た者が、大声をあげて地下ちげ役人に連絡し、地下役人は、あらかじめ決められている火つけ役に知らせる。火つけ役は、山へかけ登ってのろし場に火をつけて合図の煙をあげ、次ののろし場へ知らせる。なお、最初のにろしを発見して届けた者には、銭一貫文が、賞として与えられることになっていたといわれている。銭一貫文で、寛政五

年（一七九三）には、田地一反（一〇アール）をかうことができた。

のろし場の構造（絵堂、秋吉の例）

およそ、二・七メートル四方、深さ六十センチの中に、一・八メートル四方の石を組み、その上に松葉を十四・五荷積み、わらでおおいをする。別に、三・六メートルに、二・七メートルの番小屋を作る。どの山ののろし場もこのような構造であつたかどうかはつきりしない。（旭村史より）

四 松陰東送の碑

安政六年（一八五九）五月二十五日、午前九時頃、網乗物（細引で作つた網が、籠にかけてある）に乗つた松陰は、食事ができる程度にゆるく手をしばられ、書物を二冊もつて、小雨の降る萩を後にした。佐々並市で昼食をとり、夏木原にさしかかつて小休止となつた。

ここで松陰は、日本の現状を憂い、行く末を案じて次の詩を残した。

縛吾台命致関東 吾れ縛し台命もて関東に致る、
对簿心期質昊穹 簿に対し心に期す、昊穹に質する。



松陰東送の碑（夏木原）

夏木原頭天雨黒　夏木原頭、天雨黒く、

満山杜宇血痕紅　満山の杜宇、けつこん血痕紅なり。

私は幕府の命令で江戸へ送られるが、自分の真意は、天の神に正したらわかるはずである。自分は、公明正大である。ここ夏木原では、さみだれがしとしと降り、ほととぎすが、しきりに鳴いている。ほととぎすは、血を吐くまで鳴くというが、その血で、このあたりのさつきつつじも真紅に燃えている。自分の胸中もまた同じ思いがする。

江戸に着いた松陰は、伝馬町の牢に入れられ取り調べを受ける。刑は「遠島」ときまった。しかし、その書類が、大老井伊直弼のもとへまわると、井伊は朱筆をとって「遠島」を「死刑」と改めた。

十月二十日、父・叔父・兄宛に永訣えいけつの手紙を送る。

親思うこころにまさる親ごころ　けふの音づれ何ときくらん

千古不朽の歌である。そして、十月二十五日、

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも　留め置かまし大和魂

と詠んで、二十九歳を一期として死出の旅についた。

第三章　村の生活

旭の静かな村里は、毛利氏の萩築城、往還の完成によって大きくかわった。人の往来ははげしくなり、宿場は繁盛した。新しい仕事もでき、新しい時代を迎えた。

しかし、一八四五年頃の記録にあるように、「深山で、やまかげ山陰が薄地の田畑の作物の育成をさまたげる」ことにかわりはなかった。厳しい自然環境であったが、村人は精を出して働いた。物質的には恵まれない質素な生活だったかもしれないが、お互いに助け合い、いたわりあって、雨にも負けず、風にも雪にも負けず、心豊かに生きた。しかし、このような生活の中にも、いくたの身を震わせる出来事がおこった。

一 キリシタンと仁左衛門

ては信然に但又事程鳥成を吉刺支丹と
よきしりふし如致に及るるのよし進んば
恩受て進んば 願極はよしの如く心せしめ
いよいよよしとふとすも重しむるに列子
を神とすし心んば仁を古くは天皇をあら
まきやと云ふもを送るる富主仁鳥の支丹
一 事程鳥の家つらふをしりふし如致に及
るるのよし進んば 願極はよしの如く心せ
しめいよいよよしとふとすも重しむるに列
子を神とすし心んば仁を古くは天皇をあら

公儀所日乗（山口県文書館蔵）

一 江戸時代に...
寛永十年(一六三三)八月十四日、明木村
の仁左衛門が、神父を家に泊めたことが役
せりする
曾我又左衛門
と村傳伊良

有故雑文（山口県文書館蔵）

江戸時代に行われた、キリスト教徒に対
する厳しい弾圧の波が、本村にも及んだ。
寛永十年（一六三三）八月十四日、明木村
の仁左衛門が、神父を家に泊めたことが役

人に知れ、宿主の仁左衛門と、その弟の権左衛門が捕えられた。権左衛門は、キリシタン宗門の者でないことがわかり放免されたが、仁左衛門は、火あぶりになったといわれる。(公儀所日乗)

また、別の記録(有故雑文)では、権左衛門が宿主で、神父を泊めたかどで弟仁左衛門、子十三郎、子源八の四名が火あぶりの刑に処せられた、となっている。

山口サビエル教会の資料には、「一六三三 明木村仁左衛門処刑さる」と記録されている。

この頃、たくさんの信者が幕府の弾圧から逃れて、紫福村に移住したという言い伝えもあり、この村でもキリシタンの弾圧が行われたことは確かなようである。(旭村史より)

今日、信教の自由が憲法で保障されているけれども、ここに至るまでには、多くの人々の尊い生命の犠牲があったことを忘れてはなるまい。

二 天保の一揆

その年、厳しい年貢ねんぐのとりたてと、物価の上昇で、農民の生活は非常に苦しかった。それに加えて、暴風や洪水による凶作が続いて、生活はまさにどん底であった。それだけに、豊作を願う農民の期待は大きかった。

その頃「稲の穂ばらみ期に、牛馬の皮を運搬すると凶作になる」といわれ、この期間に皮革ひかくの運搬が禁止されていた。

天保二年(一八三一)七月二十六日、対島交易の商人、中関(防府市)の石見屋嘉右衛門が、小鯖村おさば観音原(山口市)の皮番所(農民による監視所)で、籠の敷物と荷物の包装に朝鮮犬の皮を使っていたことを発見されて、農民の

怒りをかい、その日のうちに、石見屋の打ちこわしがはじまった。これを契機に、県内各地で一揆が起こった。一か月過ぎて、一揆の気運は明木・佐々並にも及んだ。

八月二十五日、川上・福井の上かみの方の者が、吉部から発した奥阿武組と篠目で合流して、佐々並を襲った。時を同じくして、川上しもの下の方でも一揆が起こり、これに呼応して、明木でも農民が立ちあがった。萩藩は緊張し、萩に入る四つの峠を固め防備体制を敷いたが、争いもなく二十六日の暁方までに一揆はしずまった。

この時、明木で五軒、佐々並で十一軒の家が壊こわされた。一揆は、家を壊して要求を通そうとするため、その処罰は厳しかった。刑には、死刑、島送り、退村、自宅謹慎などがあつた。明木で九名、佐々並で三名の者がこれらの刑に服した。

この一揆で、明木・佐々並が具体的にどんな要求をしたか、はっきりしないが、年貢米に関する事、宿駅の運賃に関する事、物資の流通に関する事、山の草刈場に関する事などであつたと思われる。数年後、正徳三年（一七一三）から百年以上もすえおかれていた宿駅の運賃が、五割増しになつた。（旭村史より）

この後、天保九年（一八三八）、村田清風を中心として、藩の財政再建がはじまつた。いわゆる天保の改革である。

三年中行事

むかし、非常に楽しいことがあると、「盆と正月が、一緒にきたようだ」といつていた。年間を通して楽しいことが、盆と正月に集中していたからだろう。農耕生活では、作物の豊作を祈願する行事、豊作に感謝しそれを祝う行事、農耕労働の慰労的行事、それに宗教上の行事等が中心であつた。

江戸時代、村にはどんな行事があったろうか。今日まで伝わっているもの、いつの頃か消えていったもの、あるいは形を変えて残っているもの等、さまざまである。一八四五年頃の記録や言い伝えの中から、主な行事をとりあげてみよう。

(一) 月行事

○正月 一月一日から三日まで。この間はすべて休養した。一日は男が神事を行った。門松、しめかざり、鏡餅など現在とほぼ同じ。年始のあいさつ交歓等も今と変りなかった。

○七種粥ななくさがゆ 一月七日。せり、なずな、ごぎょう、はこべら、みみなぐさ、すずな、すずしろの七種でおかゆを作った。

○どんど焼き「さぎちよう」ともいう 一月十四日。正月の飾物を焼いた。

○とへ「とへい」ともいう 一月十四日。銭をつないだなわ(ひも)か、わらで作った小さな馬をもって、近所の家を訪れる。訪問された家では餅を与えた。(子どもの行事。)

○あずき粥 一月十五日。餅を入れたあずきのかゆをたき、神前や仏壇に供えて、家内中で食べた。また、柿などの果樹になたで切目を入れ、一人が「なるうかなるまいか。ならんにゃあ、ぶち切るぞ。」という、もう一人が「なりません、なります。」と、かゆを切目に入れた。

○二十日正月はっか 一月二十日。小米の粉でだんごを作って、神様に供えた。このだんごのことを「つつぼだんご」といった。この日は、山仕事に出かけると不吉なことがあると、山に行かなかった。また、この日に、麦を踏むと麦が良くできるといわれた。

○灸きゆう 日 二月二日、八月二日。この日にお灸をすえた。

○ねはん会 二月十五日。釈迦入滅の日。夜、ひのきで作った松明を、何本も家の周囲で焚き、野辺送りをした。この火にあたると病気をしないといわれた。

○節分 立春の前日。鉄なべでご飯をたき、ご飯をとったあとのなべで豆を炒った。豆を炒る時、はなしばの葉を毒虫の口になぞらえて、なべの中に入れて豆と一緒に炒った。炒った豆を一升ますに入れて、神様に供え、鬼の豆としてまいた。この時、燃やすものは、小木を用いないで枯れた菊（除虫菊）を用いた。かまどから出る煙を家中にたてこめて虫を殺した。食べ物、大きな年をとるために、大きなものを食べるということ、また、砂おろしにこんにやくを食べた。魔除けに、ダラの木の先にはなしばの葉をはきんで、玄関等の入口に立てた。

○ひな祭 三月三日。初ひなの家に親類、友人が集って祝った。ヨモギ餅をついた。

○端午 五月五日。初めて鯉のぼりをあげる家に親類、友人が集って、軽く一杯飲んで祝った。シヨウブの葉をたばねて屋根に投げた。シヨウブ湯をたてた。さき餅、さきだんごを作った。

○泥おとし 田植え終了後。下男下女も一日休息した。

○風鎮祭 佐々並 八月一日。産土神社へ風鎮立願をし、二百十日を過ぎて立願を解いた。

明 木 八月十五日。権現社で神楽舞、百八燈、子ども花角力などをして立願した。

○お盆 八月十四日、お寺参り、お墓参りをして、親類、友人間で焼香した。初盆の家にそうめんと線香を供えた。

八月十五日、地下役人に祝詞を述べ、親類間などで盆の法要をつとめた。

八月十六日、朝、精霊送りをした。麦わらなどで船をつくり、瓜、なす、だんごなどを乗せて、近くの川に流した。

八月十三日から十六日、各家の軒下に、とうろうやぼんぼりをつるした。



大蔵神社より伝わる木彫りの神楽面

明木では、十五日から十七日の間、説教があつて、その後、老若男女が輪になつて、^が餓鬼踊りをした。

八月十三日は、商家の取引決算日であつた。

○お祭り 九・十月。各地区のお宮でお祭りがあり、親類、友人間で行き来した。

手軽な着^{さかな}一・二品と酒をだしてもてなした。

○恵美須講 十一月二十日。商家の行事で、商いの相手に酒などを出して、相応のもてなしをした。

○大蔵祭 十一月二十二日、岩戸神楽を奉納。昔、佐々並大下に大蔵神社があつて、その神社に奉納するために行われていた。後に、六所神社に合祀^{ごうし}され、今日では、六所神社に奉納されている。

○出替り 十二月十三日。奉公人の入れ替えの日。佐々並はこの日すす払いをした。(理解しやすくするために、八月は太陽暦で記した。他の月は大陰暦である。)

(二) 冠婚葬祭

○元服式 男子が十三歳から十五歳になると、前髪を切り落とす元服式をした。はさみを入れるのは、伯父^{おじ}か親類の者がした。終つて、神社に神酒を捧げた。

女子の場合、十三歳の誕生日におはぐろ(結婚して歯を黒く染めること)の道具一式を、親類から送られて祝う家もあつた。

○婚禮 親類が集まり、手軽に一汁二菜くらいで酒盛をして祝った。

○葬式 明木では、お寺さんを呼び、親類、組内の者が集って野辺送りをした。翌日が初度法事で、お寺さんを呼び、一汁一菜に、にしめ付きでお酒を出し、親類、組内の者が相伴しやうばんした。

佐々並では、お寺さんを呼び、親類、組内の者が集まり、ありあわせのもので、一汁一菜のお膳ぜんにつき、その後、野辺送りをした。初度法事は、野辺送りから帰って行なった。酒なしで、一汁一菜のお膳をお寺さんに出し、親類の主だった者が、一人か二人相伴した。

○家建て 親類、組内の者が酒肴しゅこうを贈り、一日加勢をした。棟上げひねが済んで、家を建てた者が、お酒をだして祝った。

(三) 日常生活

○田植え 農作業の中では、田植えが一番大事で、また重労働だった。そこで、田植えは、組をつくって家々の田を順番に植えた。組は、明木では三〜四軒から、五〜六軒でつくられた。佐々並では、四〜五軒から、二十軒でつくられた。

○副業 農作業の合間に、薪、炭、干わらび、わらびせん（わらびの根茎からとったでんぷん粉、いろいろな原料にした）、わらびなわ（わらびの繊維をほぐしてなったなわ）、白著、かまぼこ板などを、萩や山口に売りに行った。

その他、あずき、あわ、ひえ、きび、ごま、えんどう、まつたけ等の野菜類、松・杉・栗等の加工材、忍冬にんどう、茯苓ふくりやう、五倍子ごばいし、細辛さいしん、紫根むらさき、木通ぼくつう、半夏はんげなどの薬草、はや、うなぎ、あゆなどの魚類、きじ、山鳥などの鳥類などを売っていた。

○たすけ合講（米講ともいう） 組内で平素からお米を持寄って積立てておき、組内に不幸があったときなどに、こ



鹿背坂トンネル
(長さ183.3m 高さ3.35m 幅4.10m)

れを使用するという風習もあつた。

四 交 通

(一)往還から国道二六二号線に

○仮定県道十七号線

萩―明木―大田を結ぶ県道工事が、明治十五年(一八八二)に始められ、鹿背坂トンネル工事をはじめ、大規模な道路工事が行われ、明治十七年に完成した。

なお、大正九年に鹿背坂経由が、川上村経由に変更された。

○仮定県道十八号線

山口―宮野―八丁峠―小木原―日南瀬―市―久年―新茶屋―角力場を結ぶ工事は、明治二十九年(一八九六)に始められ、幾多の難関を越えて明治三十一年に完成した。これにより、山口―萩間が、道幅三・六メートルの道路で結ばれた。コースも、一ノ坂越えから、八丁越えに変更され、車馬の通行が可能となった。

○支線の完成

仮定県道の完成により、佐々並では、これに接続する対内連絡の支線工事が行われた。(一)内は、完成年度。小松谷線(明治八年)、長小野線(明治四十三年)、舞谷線(明治四十四年)、西大下線(明治四十四年)黒ヶ谷線(明治三

十二年)、東大下線(明治四十四年)、白口線(明治四十四年)、このほか、成川線など七線が完成した。

○県道小郡・萩線

昭和三十九年(一九六四)に、拡幅舗装工事が完成し、県下で最初にできた完全舗装の陰陽連絡道路として脚光を浴びた。

○国道二六二号線

昭和三十七年(一九六二)、国道に昇格。木戸山―小木原―角力場間の工事が、昭和四十年(一九六五)に開始され、昭和四十七年(一九七二)に完成した。そして、昭和五十二年(一九七七)に、明木バイパスが完成した。

(二) 乗物の変遷^{へんせん}

○ 駕籠 往還時代から、明治三十一年(一八九八)頃まで。

○ 人力車 明治十二年(一八七九)から、佐々並では大正八年(一九一九)頃まで。明木では、昭和三年(一九二八)にまだ一台あった。

○ 客馬車 明治三十一年(一八九八)から、定期バス開通まで。

○ 定期バス 小郡―萩間 大正二年(一九一三)防長自動車株式会社が運行開始。
山口―萩間 大正四年(一九一五)山崎自動車商会在が運行開始。

国鉄防長線(三田尻―山口―佐々並―明木―萩)が、昭和八年(一九三三)、全国で二番目の国鉄バス路線として開通した。大正十四年(一九二五)に運動をは



長小野線を走る国鉄バス

じめて、九年目に実現し、佐々並小で盛大な開通式が行われた。

○支線バス 国鉄長小野線 昭和二十六年（一九五一）、五月開業。昭和五十九年（一九八四）運休。国鉄同前・黒ヶ谷線 昭和二十八年（一九五三）、十二月開業、昭和五十九年（一九八四）運休。

国鉄舞谷線 昭和二十八年（一九五三）、十二月佐々並、下長瀬間を下長瀬線として開業。昭和三十五年（一九六〇）十月下長瀬、舞谷間を舞谷線として開業、昭和五十八年（一九八三）運休。

国鉄矢代線 昭和三十八年（一九六三）、四月に開業、昭和五十七年（一九八二）運休。

カ石（佐々並 大下） 五石風呂



石風呂（佐々並日南瀬）



風呂の原形ともいふべきもので、今日のように湯をつかうようになったのは、江戸中期以降といわれる。最初は、蒸気浴を主としていた。この石風呂は、中で火をたき、底の石を焼いて、その上に、萩の海岸から運んだ海藻（も）を敷いて、その上で休んだ。のちには、海藻のかわりに、むしろを用いたといわれている。神経痛・リュウマチによく効いた。

六 力 石

各地の神社にあることから、お祭りの行事の一つとして、あるいは寄り合いの余興として、かくらべに用いられたものと思われる。かくらべは、各種の石を頭上に差上げる重量上げ方式だったといわれている。

第 四 章 産 業

一 石灰・銅・銀

(一) 石灰

石灰の生産が、明木迫山の現在の不燃物処理場の所で、明治三十八年（一九〇五）、岡政之助によって始められ、その後、明木農業協同組合が引き継いで、昭和三十三年（一九五八）まで続けられた。

石灰は、稲作をはじめ畑作にも欠かせない肥料として需要が多く、多い年は、年間六百三十三トンも生産した。



採掘された石灰山

(明木 蔵屋)



跡場座山鉾並々佐

(二) 銅・銀

佐々並長小野の鉾山は、はやくから採掘され、元和三年（一六一七）に、銅が採掘されたことが「御蔵入御算用状に記録されている。（旭村史より）その後、文政五年（一八二二）前後に、銅銀を採掘したと言ひ伝えられている。

明治三十五年（一九〇二）、愛媛県の曾根某が再開し、同四十年には、大阪の田中弥太郎が引き継ぎ、昭和のはじめに、中山某の手に移ってから規模を拡大した。昭和十年（一九三五）頃まで、銅・銀を生産したが、電気事故により廃鉾となった。

この鉾山には、小野坑と吹原坑があつて、掘られた鉾石は、最初は馬の背に積んで、一回百五十キロ程度を三頭の馬で、一日に四回、美東町綾木の薬王寺鉾山の精錬所へ運んでいた。道路ができてからは、二・三台の馬車で、一日に一回通うようになった。

明治三十七年からは、佐々並鉾山で選鉾し、綾木・岩永・小郡經由で秋穂二島見能浜港から、大分県佐賀関精錬所へ輸送をはじめた。

記録に残っている銅の最高の年生産額は、七百五トンである。

鉾山従事者は、ほとんど村外から移住した人で、付近にバラックを建てて住み、閉山頃には、約六十名、家族を含めると百五十人ぐらいいたといわれる。（佐々並村史より）

また、この鉷山で、昭和四十年代のはじめに、蒼鉛（ビスマス）の採掘が行われた。全国的に数少ない鉷山として、一時は注目されたが、含有量が少なかったために閉山となった。

なお、一獲千金を夢みたわけでもあるまいが、明治四十五年（一九一〇）から大正九年（一九二〇）までに、およそ二十五か所で試掘が行われた。いずれも含有量が少なく、飲料水や灌漑用水を汚濁して、鉷毒を流出するおそれがあったりした。又、試掘地内を道路が通り、公益上に支障があるなどの理由で、本採掘されるには至らなかった。

○当座場……荒鉷を上鉷と粗鉷に手選して、人力で約三センチ立方に砕いて精鉷し、粗鉷を機械で選別した場所。

（三）銅

明治の終り頃、明木迫山で松永某が最初に銅の採掘をはじめた。大正六年（一九一七）頃に、駒田某が引き継ぎ、百の立坑を掘って優良な鉷脈を発見した。

駒田某は、鉷脈を発見するとすぐに、その権利を、四国から来た某に売った。四国の某は、しばらく採掘を続けたが、福岡市に本社のある明治鉷業に売り渡した。明治鉷業は、昭和四十年頃まで採掘した。最盛期は、四・五十人の人が働き、坑口付近に住んでいた。

立坑のそばに、精錬所を設け、ここで精錬していた。精錬された銅は、十六貫（約六十キロ）の玉にして出荷して



初期に掘られた坑口
(明木迫山植村幸重氏所有の山)

いた。



今はダムのために水の流れなくなった水路
(佐々並ダム下流約三百メートル)

二 魚切りの水路

今は、佐々並川ダムのえん提ていの下しもに静かに眠る魚切りうおき。だが、その昔、ここには、ごうごうと音を響かせ、水しぶきをあげる高さ十八メートルと十三メートルの二つの滝があった。そして、この二つの滝は、すべての魚の遡行そこうをさまたげた。滝つぼまで上って来た鮎あゆは、そこでしばらく休息すると、再び下流へと下って行った。

「この滝に、鮎の上れる水路を作ろう。」

大下・舞谷地区の人々が、最初に立ちあがった。明治九年（一八七六）である。みんなでお金を出し合って、石割りに必要なたがねやげんのうを買って取り組んだ。

容易にできそうにみえた水路だったが、実際にとりかかってみると、並大低ではなかった。十八メートルの岩壁は、まさに鉄の塊かたまりだった。工事は中止された。

明治十六年（一八八三）、こんどは、佐々木新吉、白上安治郎、弘中関五郎を代表とする村民によって、大規模な工事が計画された。新しいく

つさく機や、火薬をつかつて取り組むことになった。そのためには、たくさんのお金が必要だった。そこで、村民のお金だけでなく、他からもお金を借りることにした。そして、この借金の返済は、工事完成後の鮎漁による収益金を当てることにした。

また、当時は、こうした収益金に対してたくさん税金がかけられていたので、その免除を県令（県知事）に願いで、十年間の猶予を得た。このようにして工事は、始められた。

しかし、またしても、くつさくは難航した。まさに、一センチ刻みの気の遠くなる工事だった。とりかかって二年の歳月がたちまち過ぎた。それでも、ようやく、幅六十センチ、長さ二十メートルと十五メートルの二本の水路を、岩壁にS字型に刻みこむことができた。鮎の稚魚が、やっと上ることのできる、ギリギリの水路であった。だが、水深が浅く急流のために、漁業として成り立つほどの鮎は上ってくれなかった。村民が夢にみた、「三十センチにも達する鮎が、群れをなして川底の大きな石についた苔こけを求める姿」からほど遠いものだった。

多くの収穫をあげないうちに、免税措置の猶予期限は近づいてきた。再び、県令に免税措置の猶予を十年間延長する願いを申し出て、それが認められた明治二十七年（一八九四）、三度目の水路工事にとりかかった。

そして、この工事で、ようやく鮎が自由に上ることのできる水路が実現したのである。（佐々並村史より）

三 宗哲井手

宗哲の時代（一八〇〇年代のはじめ頃）に、佐々並には、全部で二百九十五の井手があった。そのうちのほとんどは、十間けん以内で、なかには、十六・七間のものもいくつかあった。宗哲井手は二十一間半と記録されている。二十一



宗哲の墓



改修後の宗哲井手
(佐々並下長瀬)

間半を、メートルになおすと、おおよそ四十メートルにもなり、群を抜いて大きな井手だったことがわかる。

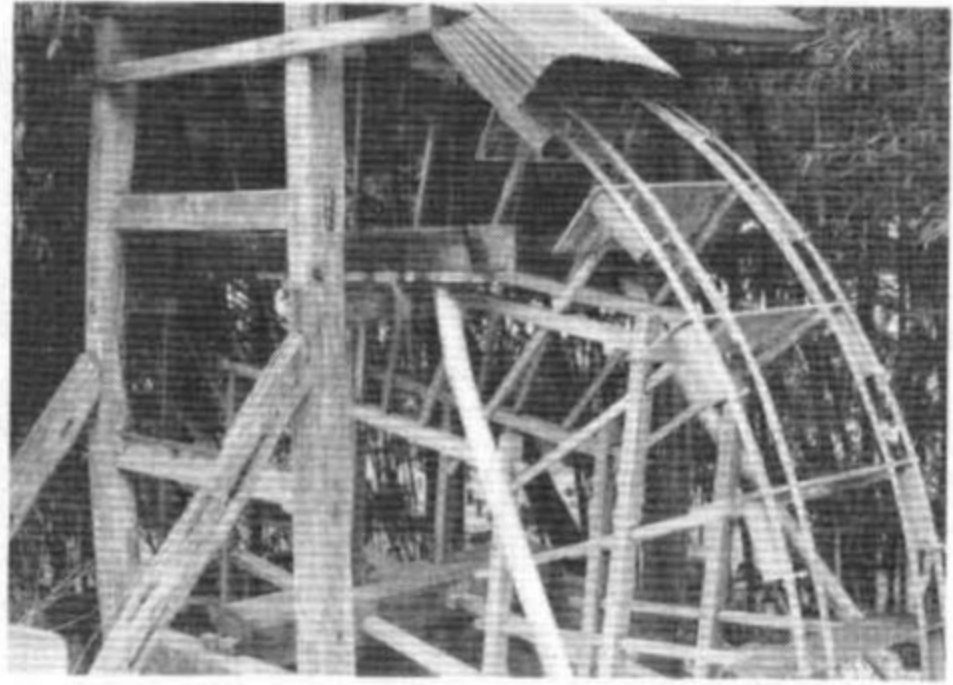
今、屋敷跡附近にある宗哲の墓は、当時の人々がその偉業をたたえて建立したと伝えられている。

墓には、「天保六年（一八三五）乙未　○当村地主宗哲之墓　閏七月建之」と刻まれている。

四 揚水車

佐々並地区は、灌漑用水は比較的豊富で、用水の便はよいが、大下には水利が悪く、揚水車によって水を汲みあげているところがある。

この揚水車は、直径約六メートル、幅一メートル、二十八本の矢が、輪の両側にある。その矢に、直径十センチ、



揚水車 (佐々並大下)

長さ約三十センチの竹筒が取り付けられていて、これが水をすくう仕掛けになっている。現在の水車は二代目で、最初の水車は、明治の終り頃に作られたといわれている。

動力を必要とせず、川の流れを利用してたくさんの水をあげ、四反(四十アール)の水田をうるおすことができる。現在も稼働していることから、大学等の研究対象となり、見学者が多い。

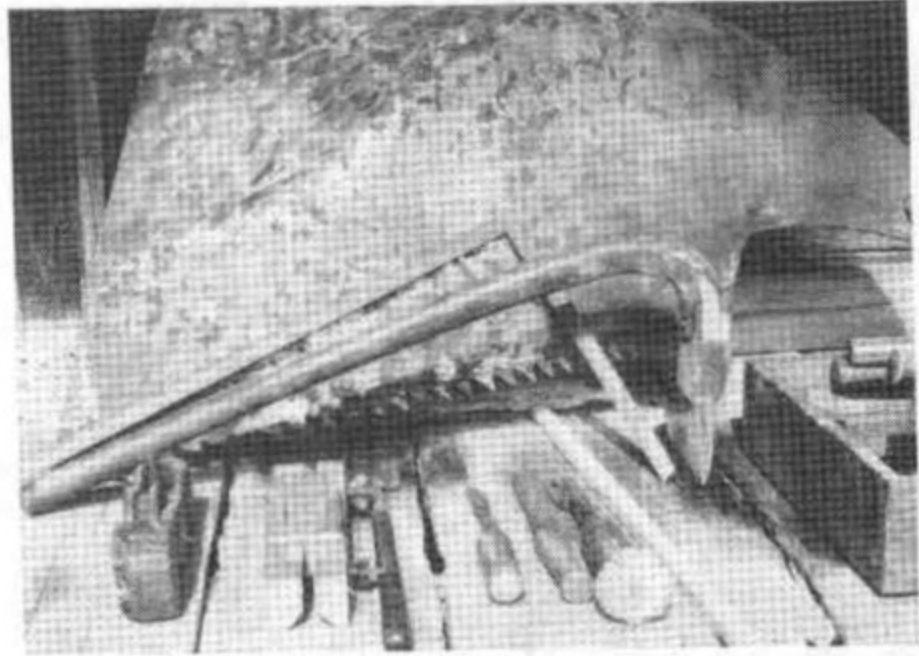
五 製 氷

明治二十二年(一八八九)から明治三十年頃まで、標高五百メートルという自然環境を利用して、氷をつくっていた。冬の厳寒期に、ブリキカンや木桶ひに良質の水を少しずつ加えて凍こらせ、それをおがくずのはいった入れ物に入れて、貯蔵庫で夏まで保管する。

貯蔵庫(氷室ひむろ)、四メートル四方、深さ二メートルで、内側に石垣が組まれている。貯蔵庫内は、まわりを炭やおがくずでかこんで、地熱や大気を遮断しやだんしていた。夏になって、山口の祇園祭ぎおんさいなどに馬に積んで売りに出かけた。食用の氷のほかに、池の水をつかって病人用などの氷もつくっていた。



氷室 (佐々並夏木原)



上舞谷広田治三郎氏が使用された大工道具
(原田篤氏宅で撮影)

六 舞 谷 障 子

舞谷地区での障子作りは、寛政十二年（一八〇〇）生まれの上舞谷、原田新蔵が吉敷郡仁保村で習ってきて始められたと伝えられている。明治にはいって、家内工業として盛んになり、「舞谷障子」として山口・小郡方面に広く販売された。

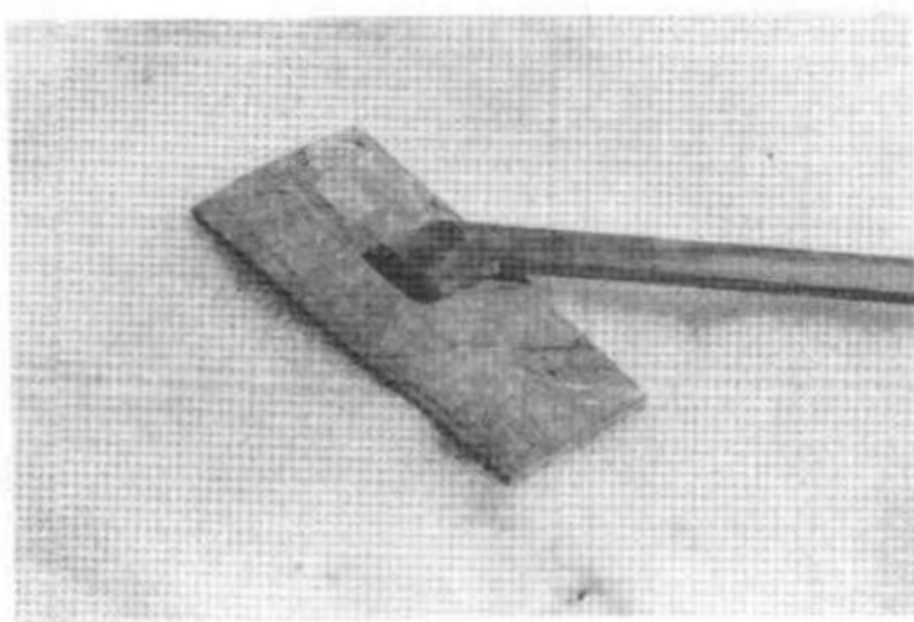
大正の終り頃から、機械化された製作に押されて、昭和のはじめに、百年も続いた舞谷障子も、とうとうその歴史の幕を閉じた。

また、和田地区でも、障子作りが行われた。

七 矢 代 の く わ ぶ ろ

良質の木材に恵まれた矢代地区では、檜かじの木をつかってくわぶろの製作が行われた。くわぶろとは、先に鉄の切れ刃のついた木製の平鋏ひらくわのことである。

慶応年間（一八五六〜六七）に始められたと伝えられ、昭和二十年（一九四五）代まで続いた。かたぎ山と呼ばれる山から、直径五十センチもある檜の大木を切り



くわぶろと柄型（矢代林巖氏宅で撮影）

出して、長さ四十センチ、幅二十センチ、厚さ二センチの板にして、一年間、家の中のいりり端で干して煤けさせたものを、加工して作っていた。材料を永く保存する場合は、水につけておいた。製品は、木間や美祿郡、萩市、奥阿武の方まで、肩にかついで売りに出かけた。「くわぶろ」のことを、「ぶろぐわ」ともいう。

八 佐々並豆腐

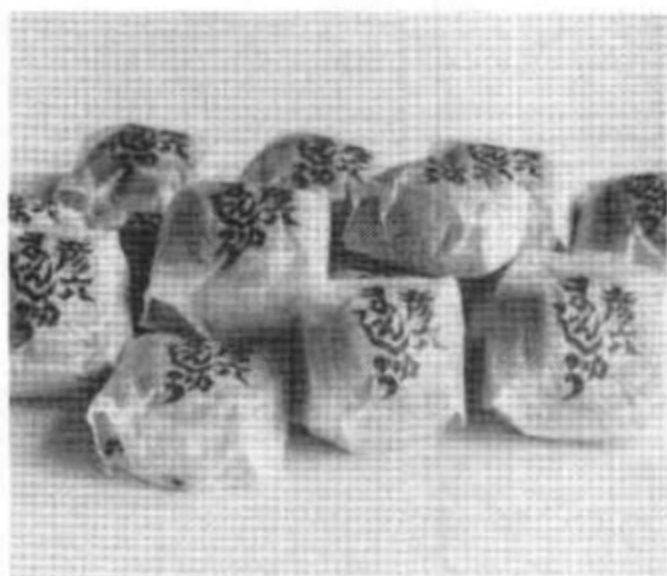
昔ながらの手作りの味で、県内外に広く知られている「佐々並豆腐」は、土山隆幸さん（七代目）方で作られている。創業は、一八〇〇年頃と伝えられている。往還の宿場町としての佐々並の宿の「土地の味」として作り始められ、二代目おぬいさんの時代に、その舌ざわり、かたさ加減などの良さで、すっかり名物となり、「おぬい豆腐」と呼ばれて親しまれるようになった。

四代目亀太郎さんが、更に味覚に工夫をこらし「亀太郎豆腐」と呼ばれるようにした。この亀太郎豆腐を伊藤博文公が、大変気に入って、首相時代に再三東京に出て来るように誘ったが、亀太郎さんは、「土地の名物の豆腐がなくなる。」と断った話は有名である。

先祖代々受け継がれた伝統の味について土山さんは、「豆腐作りは、一夜水につけた大豆をすりつぶして豆乳を絞（しぼ）りだして、釜（かま）で四・五十分につめ



七百年の伝統を
語る看板



彦六まんじゅう

る。このあと、水とにがりを加えてタンパク質をかためる「よせ」（塩析^{えんせき}）という工程に入るが、にがりの量、温度加減で全く味がかわるほどで、ここに佐々並豆腐の極意^{ごくい}がある。」といわれる。

後継者問題で、一度はこの伝統の味も終りになるかと惜しまれたが、七代目隆幸さんは、大阪の大手チェーンメーカーの課長の座をふりきり、一念発起して後を継がれた。わたしたちが、なにげなく食べている豆腐だが、二百年の間、多くの苦難を乗り越えて、今日まで営々と豆腐作りに励まれる土山家の人々のご苦勞を忘れてはならない。

九 彦六まんじゅう

「彦六まんじゅう」の名で親しまれているまんじゅうは、明治三十四年生まれの内村治郎さんが始められた。創業以来五十年の歴史をもつ。彦六・又十郎の心を、まんじゅう作りに託^{たく}して内村さんは、「私利私欲をぬきにして、みんなに喜ばれ、好かれるまんじゅう作りをしてきた。」と言われる。口にとける甘さの余韻を、ここに感じた。

第五章 学校

一 学校制度

明治五年（一八七二）、政府は、「村に学校に行かない家が一人もなく、家に学校に行かない人が一人もないよう」にするために、教育制度を設けた。制度は次々に変わったが、大きく変わったことのみをあげると、次のようになる。

○明治六年（一八二三）、各村に学校が開設された。学校といっても、寺小屋教育の色彩が強く、お寺や個人宅があてられた。明木では、市の瑞光寺、佐々並では、市の木村源助宅が、それぞれ校舎とされた。

学校に行くのも全員ではなく、行かない人もいた。

○明治十九年（一八八六）、義務教育制となり、尋常科四年（六歳から九歳まで）は、全員就学しゅうがくしなければならなくなった。さらに、希望者は、四年間高等科で勉強できた。

○明治三十六年（一九〇三）、国定教科書制となり、全国で同じ教科書を使用するようになった。

○明治四十年（一九〇七）、義務教育を二年延長して、小学校六年を義務教育とした。そのうえに、高等科二年を設けた。

○昭和二十二年（一九四七）、明治四十年から四十年間続いた教育制度を、全面的に改正し、六三制が実施された。小学校六年、中学校三年が、義務教育となり、今日に至っている。

二 学校の統合

長い伝統をもち、多くの卒業生を送り出した長高小学校、舞谷分校、矢代分校が、児童数が少なくなって、佐々並小、明木小に統合された。それぞれの学校の歴史をたどってみよう。

長高小学校

○明治七年（一八七四）佐々並小学校、長小野分校、高津分校が、長小野・高津地区に置かれて発足。

○明治三十二年（一八九九）長小野、高津分校を合併して、長高教場となる。

○明治四十五年（一九一二）長高小学校として独立する。

学級数二、児童数七十七人、教員数二人

○昭和二十八年（一九五三）運動場を五百坪（一六六七平方メートル）に増設。

○昭和三十八年（一九六三）佐々並小学校に統合し、長高小学校を廃止する。



長高小学校跡に建つ碑

舞谷分校

○明治七年（一八七四）佐々並小学校舞谷分校として発足。

○昭和四十五年（一九一二）校舎を西山に移転して、「長谷分教場」と改称し、



当時の舞谷分校

長瀬地区も通学を開始する。

○大正三年（一九一四）舞谷・長瀬地区青年会の奉仕作業により、三百坪（一〇〇〇平方メートル）の運動場が完成する。

○昭和六年（一九三一）校舎を再び前の場所に移転して、舞谷地区の児童のうち、三年生までが通学するようになる。児童数は、多いときに二十人、少ないときは、五人の場合もあった。

○昭和三十五年（一九六〇）佐々並小学校に統合し、舞谷分校を廃止する。

矢代分校

○明治六年（一八七三）明木小学校矢代分校として発足。

○大正八年（一九一九）、教室面積五十六平方メートル、運動場三百三十四平方メートルの新校舎及び付設教員住宅を新築して移転する。

一年生から四年生までの十六人が在学した。昭和十年、児童数が二十三人に増加したが、その後は、十人から十五人ぐらいであった。

○昭和三十九年（一九六四）明木小学校に統合し、矢代分校を廃止する。

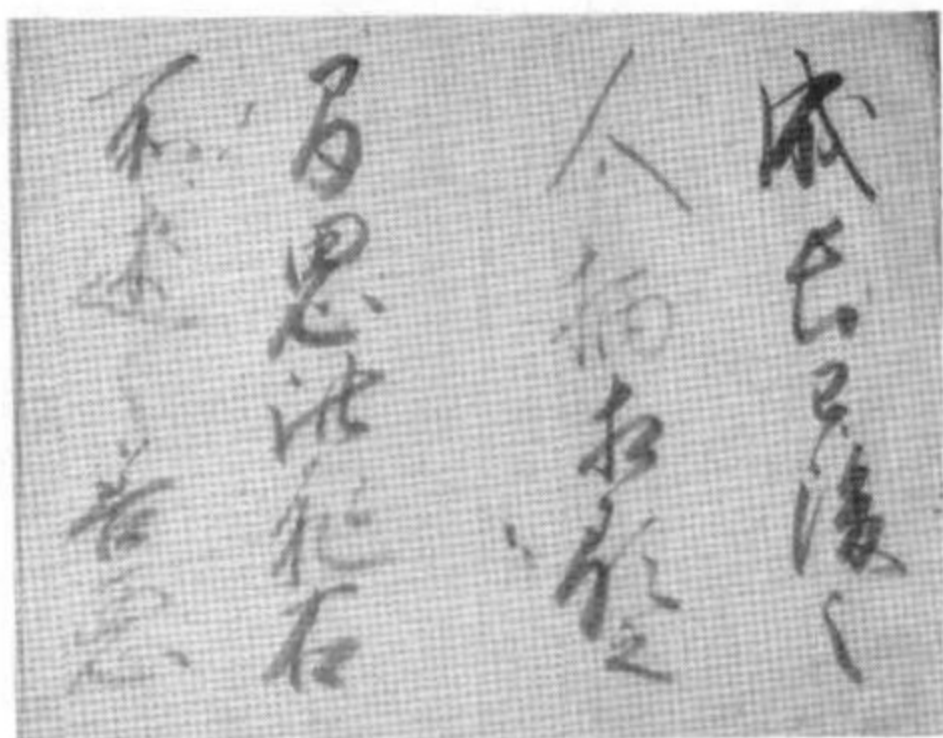


当時の矢代分校

三 学校生活

時代の流れとともに、学校生活も大きく変わった。どんなにかわつただらうか。時代を追つて、その頃の様子をたずねてみよう。

(一) 寺小屋時代



寺小屋で使われた教科書
(明木田中弥一氏蔵)

読み書きそろばんの時代である。読み書きの手本(教科書)は、写真でわかるように、一流の書家の書体で書かれていた。これを読み、これを手本として、習字の練習をした。読み書きといえば、いかにもみやすく感じるが、決して容易なことではなかったことがわかる。写真の手本は、田中槌五郎氏(天保十年、一八三九年没)が使われたものである。

次に、文久三年(一八六三)、漢学を教える塾を訪れてみよう。

入学期日、入学年齢、通学時間はまちまちである。八歳から三十歳ぐらいまでの人がいる。授業は一对一で、先に入塾した者が、後から入った者を教える。一番先に入った何人かが、塾の先生に習っている。

入学した日には、「大学 朱喜 章句」の六字を、先輩の先生が字つき棒で一字一字指しながら教える。先輩は、何度も読んで聞かせる。それで習うこ

とは終り。あとは自分で音読して復習する。

二日目は先輩の前に出て、前日習った所を読む。満足に読めたら、その先の五・六字が教えてもらえる。このようにして進んで行くが、五・六日過ぎると、最初に習った所を忘れてしまう。そうすると先輩に叱られる。その叱り方がひどいから泣き出す。涙や鼻汁が本の上に落ちる。そのぬれた上を、字つき棒でつくから紙が破れてしまう。だから、大抵の人の最初のページの右半分は、本の原形をとどめていない。

こうして、一行終り、二行終って、行数がだんだんふえ、孟子（四書）に進んだ頃は、一日に一ページ以上、五経の難しいものでも、一日に二ページぐらいは進むことができるようになる。（「幼児の見聞」より要約）

（二）明治・大正時代

○教科の学習

最初は、全教科がまとめて一冊になっていた。その後、修身、読み方、書き方、算術、ソロバン、歌などの教科書ができた。大正にはいると更に、つづり方、国史、理科、地理、体操、唱歌、図画が加わり、高等科では農業があった。

修身は、本文を暗唱した。読み方は、ハナ、ハト、マメ、マスから始った。書き方は、ノ、メ、ク、タ、から学習した。ソロバンは、「ニーテンサクノ五」「ニツチンガイツシ」といった暗記方式で練習した。放課後は、図書館で自習時間があり、図書館当番もあった。

○ノート

明治の初めは、石板（もち歩きのできる小さな黒板）を使っていた。後にノート、鉛筆が使われるようになった。

大正時代にはいると、各教科の専門のノートができ、国語は一センチ四角ぐらいの升目の入ったノート、算術は無地で、上に1から10までの数字が入っていた。習字は、一枚の半紙に何度も練習し、真黒になるまで使っていた。(このような練習方法やノートの使い方は、昭和二十年代もしていた。ノートに最初鉛筆で書き、その上に青インクで書き、最後に赤色のペンで書いて、漢字や英単語を覚えていた。)

○かばん

明治から大正にかけて、風呂敷が主に用いられた。風呂敷に、教科書やべんとうをつつみ、縦がるい(風呂敷を肩と脇の下で結ぶ)か、横がるい(風呂敷を胸に巻きつけて結ぶ)で通学した。大正の中頃から、女子は布製の袋を作ったかばんにした。同じ頃に肩掛け横かばんが、用いられるようになった。

○服装

明治・大正とも、夏はひとえもの、冬はあわせ、寒い時は、はんでんをはおった。大正の中頃から、クラスで何人かが洋服を着るようになった。

式のある日(国民の祝日、入学式、卒業式)には、羽織、はかまを着用した。大正に入ると、紋付、羽織、はかまで盛装するようになった。

教師の服装は、明治時代、男性はつめえりの服、女性は羽織、はかまで、大正に入って、男性は背広を着用するようになった。女性は同じだった。

○髪型

男子は、明治・大正を通して丸刈り。女子は、明治時代、おかつぱ、おさがり、もつあげ、いちようわけ、二百三高地、二つ分けして、三つ組み、まき髪など。大正時代は、おさげ、おかつぱ、長い髪を一つにして後頭部で結ぶか、

三つ組にした。長髪にして前髪を両方にしほり、後髪をしばるか、三つ組にする人もいた。長髪を七分三分に分け、後でしばったり、三つ組にしたりもした。大正時代の女子は、長髪が多かったようである。

○べんとう

明治時代、おにぎりを竹の皮でつつみ、にしめ・漬物・うめぼしなどのうち一・二品を、おかずとして添えた。時に玉子やきが加わった。おにぎりを紙につつんで行くときは、おにぎりを餅焼網で焼いた。こうすると、おにぎりが香ばしいし、つつみ紙が何度も使えた。遠足の日には、かまぼこ、はす、昆布などがついた。

大正時代、やなぎごおり、アルミニウムなどの金属のべんとう箱、木製のべんとう箱、わっぱが使われ始めた。おにぎりも、きな粉むすび、梅干むすび、わかめむすびと多様化した。おかずは漬け物が主であったが、大根、芋、はす、こんにやくなどの煮物、時に玉子やき、つくだになどが添えられるようになった。日の丸べんとうという言葉が、この頃から使われはじめた。

○はきもの

明治時代 晴天の日は、手づくりのぞうり。(これは、昭和二十年代まで続いた。) 雨の日は、下駄、高ぶくり。冬は、わらじ。大正時代になると、ゴム靴、ズック靴がはじめ、遠足などではいた。雨の日には、雨ぐつをはくようになった。冬は、地下たびをはく者もいた。雪の日、高下駄にぞうりをしばりつけて、はいたりもした。

明治・大正時代の学校生活をおくった人に、印象に残っていることを語ってもらった。

○修身の時間に、「先生や父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。三尺退って師の影を踏まず。」というように、先生や父母の恩を忘れてはいけないと、身にしみて教えられた。

- 校長先生からいつも「女学生は、女学生らしく」と言われた。
- 修身の時間にならった二宮金次郎のことや、おおかみ少年が助からなかったことが、思い出される。
- 先生のいわれることは、神様のいわれることのように思えた。
- 儀式のたびに、教育勅語が奉読された。国旗とともに一番思い出深く思う。
- 遅刻すると廊下に立たされた。冬は、火鉢のそばであたらせてもらえなかった。足が冷えて困った。
- 忘れ物をして、ひどい罰にあった。どんなに遠くても、とりに帰らされた。
- 悪いことをすると、机についているすずりのふたでたたかれた。先生がおそろしかった。
- 分校は復々式で、一・二・三年と四・五・六年のニクラスだったので、教科によっては、六年の教科書を四・五年生が習った。
- 学校に入るとき、最敬礼をした。
- 学芸会を学校でして、各地区でもした。
- 遠足で山へわらびをとりに行った。
- 遠足するとき、大きなわかめむすびを竹の皮でつつんで、漬け物をそえ、おやつは、かき餅を焼いて持って行った。
- 走ることが好きで、いつも選手になれた。今でも、バスケットボールぐらいできると、学校のそばを通るたびに思う。(大正五年生れ、六十七歳)
- 大雪の日に、ぞうりでマラソンをした。



第1回(明治39年)学芸会のプログラムと案内状
(笛吹 竹内貞雄氏蔵)

○どんなに学校から遠くても、歩いて学校に通った。

○明治三十八年（一九〇五）、日露戦争に勝って、村民総参加の運動会があった。

○電燈がなく、ランプで勉強した。

○商店に奉公しながら、学校に通った。

○材木を藪に出すための筏作りの手伝いや、炭や薪を車力しゃりきで運ぶ手伝いをした。川を渡るときは、舟だった。

○農繁期や忙しいときは、子もりや家事の手伝いで、自由に学校を休めた。

○長い田舎道だったので、秋は山で、かき、くり、あけびなどをとって食べながら帰った。

○毎日、一里半（六キロ）の道を歩いて通うのが、とてもつらかった。父が、雨や雪の日に迎えに来てくれた。父母の苦勞は、たいへんだったと、今でも感謝している。

(三) 昭和になって

昭和のはじめは、世界的な大不況、十年代は戦争と、日本は暗くて長いトンネルに入った。学校に通っているとはいうものの、授業は二・三時間、あとは食糧増産のために、運動場を掘り起こしてのいもづくり、飛行機の燃料用に松やにとり、布を作るためにラミー・コウゾウの採取、炭焼き、野ブドウ採り等々の作業の連続であった。そして終戦。戦後、昭和二十二年（一九四七）、教育制度は、抜本的に改革され、六三制が実施された。

当時のことを思いだして、明木中学校二十周年記念同窓誌に、伊藤精士氏は次のように述べている。

私達が入学した昭和二十三年は、六・三・三の教育制度が生まれ、ようやく礎が出来かかった頃だと思う。戦後三

年、校舎とは名ばかり、昔の公会堂に板を打ちつけ、衝立ついたてを置いて間仕切りをした教室、上級生の使用済みの落書と注釈で汚れた教科書、運動場といえは、それこそ猫の額程の忠魂碑前、それでも昼休みには、布で作った手製のボールで野球をし、前の家の窓ガラスを割ったものだ。何から何まで、今の中学生とは雲泥の差だったが、今想えばなつかしい。

想い出といえはまだある。勉強らしい勉強はしたことがなかった。中学校は小学校の延長で、帽子には白線が一本入り、格好がよくなった程度だから推して知るべしだ。三年生の時だったか、英語と農業が選択科目で、どちらかに決めねばならなかった。友達と相談して、「農業はエライ」という単純な理由で、英語に決めた。その当時、農業を選択している下級生が、肥桶を担いで私達の横を通るのを窓越しに眺めてこういう結論がでたのである。

しかし、英語を選択してひどい目にあつた。もともとそういう動機で選んだ英語だから分る筈はずがない。しかも男女合わせて十五人ぐらいの生徒である。先生の攻撃範囲は、その内の男性軍五・六人と非常に狭く、攻撃は痛烈をきわめポンポン当てられ立たされたものだった。英語の時間がくると憂うつになり、農業の連中がうらやましかつた。

秋になると彼等の作ったサツマ芋を学校でふかし、全校生徒に配給があつた。その時など私達は気兼ねをして食べたものだ。

又、父が私達の学校に教員として奉職していたので、試験時にはやかましく小言を言われた。それでも下校すると直ぐ、遊びに出たものだ。何年生の時か忘れたが、試験期間中例の如く、学校から帰ると友達と川へ鮎取りに出かけた。現在、川の流れが変わり水が無いが、当時は岸の下の山根君宅の前の県道の下を流れていた。その頃、萩から田中先生が自転車で通勤されていたので用心はしていたが、つい夢中になりひっかけ竿を振り回していた。「オイッ」という声でヒヨイと上を向くと、田中先生が自転車を跨いで川を覗のぞき込んでおられる。

「君等は、試験中というのに何をしとるかつ？」と一かつである。

何しろ私達は、ふんどし一ちょうで泳ぎ回っていたものだから、逃げるに逃げられず、川の中へ棒立ちである。どういう弁解をしたか忘れたが、あんなバツの悪かったことはなかった。

そんな不勉強の報いか、現在、安月給取りで悲鳴をあげている。

第六章 民間信仰

自然界には不思議なことが、たくさんある。この前まで、こんこんと湧いていた清水が、突然止まってしまふ。昨日までの晴天が、一天にわかにかき曇つて嵐となり、せつかくの稲をだめにする。こうした自然の摂理に対して、人は驚きあわて、自然に対して畏敬の念をもった。そしてひたすら祈った。

民間信仰は、特定の宗教に関係なく、村人が生きてゆくうえで、「起こってはならないことが、起こらないように」「やろうとしたことが、やり遂げられよう」「不治の病気が、なおるよう」と天地間の精霊に託して、祈った跡といえよう。今は忘れ去られたもの、今も生きているものもある。それらの中から、いくつかをとりあげてみよう。

一 庚申塚

旭村内のほとんどの地区にある。百姓の神、農業の神として信仰された。奈良時代に中国から伝わり、江戸時代に

もともと大陸で、行路の神をさしたが、わが国では峠や辻、村境など



横瀬の荒神様



堂尾の庚申塚

全国に広まった、といわれる。今でも地区の行事としてお祭りをしているところがある。昔は、お祭りを庚申の日（六〇日毎）に行っていたが、今頃は年三回く一回が多い。

お祭りには、当家に講内の者が集まり、当家では、ご飯を茶碗に山盛りしてふるまっていた。年に一度、新しいしめなわか、申緒を作って供えるところもある。

二 荒神様

土地を最初に開墾した時にまつった神で、地神とも言う。屋敷森や同族神、部落の神として、荒神森などの大木を中心にもつった例が多い。

荒神は一般に、かまどの神、あるいは火の神として家内やいろりやかまどにまつられる。

三 道祖神



管蓋の猿田彦大神

の道ばたにあつて、悪霊や疫病の侵入を防ぎ、村を守つてくれる神として信じられている。そのため、この神のまつられる場所が、多く虫送りや疫病送りの終着点とされている。

猿田彦の神が、擬定されているところもある。これは猿田彦が、神々の先導をつとめたからといわれる。道祖神のまつられている村境で、市いちが開かれ、各地から人が集まり、男女交際の場となったことから、縁結びの神となり、それがもとで、子授けの神、子どもを守る神ともなっている所がある。

四 火除ひよけ様

火事にならないように、火事になつても燃えひろがらないように祈つた神。

五 水神様

水をつかさどる神。まつる



大下の火除様

場所により、井戸神、川神、池の神と呼ばれる。



河村昭正氏宅の水神様

六 正堂様しょうどうさま

今からおおよそ三百二十三年前、一人の修業僧が小木原の地を通りかかり、道の上のおむろに泊って座禅を組んだ。ところがどうしたことが、その夜、おむろが火につつまれて焼け、修業僧も死んでしまった。僧は、息をひきとるとき、「私はやけどで死ぬので、村人がやけどをしたらなおしてあげよう。」といった。

村人は手厚く僧をとむらい、やけどの観音様としてまつた。そして、毎年、八月二十七日の命日に、臨濟宗、西林寺の住職を招いて、お祭りをして供養した。

この観音様にお願ひすると、どんなひどいやけどでもすくなおった。戦前は、お祭りにすもうや芝居しばいをしてにぎやかで、山口、平川、小鯖、篠目の方からも、お詣りがあつた。今でも、赤飯をたいてお祭りをしていゝる。

七 鐘馗様しょうきさま

正堂様の近くに「鐘馗様」と呼ばれる神が、崖がけの上の岩の間にまつられていゝる。人間の息がかかるといけないといわれている。いわれについて、広辞苑に次のように書かれています。

「唐の開元年中、終南山の進士鐘馗が、玄宗の夢の中に出て来て、魔をはらい、



正堂様 (下小木原)

病をいやしたという故事から、疫鬼を退け、魔を除くという神。」

八 隠れ地蔵



隠れ地蔵 (角力場)

今からおよそ八百年前のことである。ある騎馬武者が長府を立ち、西市を通って、長門の大寧寺峠を越えて、深川に出た。そこから三隅の滝坂を上り、木間を通り、古が迫を越えて、向横瀬に出て、横瀬橋の手前まで来て、人馬共に倒れた。横瀬の人が、馬に水をのませくつわをはかせ、武者の手当をしたところ、人馬共に元気になり、また、旅を続けた。

角力場のもとの地蔵の所まで来て、再び人馬共に倒れ、立ちあがることができず、そのまま息をひきとった。

角力場の人が集って、その武者を見た時、あまりにも立派な出で立ち、あまりにも高貴なよそおいなので、これはただの人ではなく、天下の名将だろうということになり、人を地蔵尊としてまつり、馬を神様としてまつった。

ところがこの地蔵尊の霊験あらたかなことは大変なもので、難病、願いごと等なんでもかなえられた。

噂を聞いて遠く北九州からも多数の参拝者があるようになった。

(昭和四十三年八月、角力場一老生の記より)

今でも、年二回、赤飯をたいて、しめやかにお祭りをしてる。

九 石仏様いしぼとけさま



石仏様 (下横瀬)

一八四五年頃の記録に「石は野面のづらで白苔が生い茂り、大変古い墓に見える。」とあることから、相当昔からあったことがわかる。

言い伝えでは、吉見家の家来のお侍さむらいが、戦いに敗れてここ下横瀬の地まで落ちて来たが、歯と耳の病いがもとで倒れて死んでしまった。里人が、憐れあはれんで丁重ていじゆうにはおむったところ、歯と耳の悪い人の病いがなおった。

それから、歯が悪いときは、ちゃばつお(茶初湯)をもってお詣りし、耳が悪いときは、年の数ほど火吹竹をもってお詣りして、願をかけるようになった。そうすると、たちまち歯の痛みがとれ、耳がよく聞こえるようになった。耳がよくなったら、石仏様に火吹竹で一吹きしてお礼をした。

今でも火吹竹が供えられ、香華の絶えることがない。

十 白口弘法大師

元禄十六年(一七〇三)春のこと、六十歳あまりの、破れ衣にあじろ笠をかぶり、手には錫杖しやくじゆう、鉄鉢を持ち、手申脚絆あしはんに素足にわらじをつけた托鉢僧たくはつそうがあらわれた。僧は、「霜寒き白衣の口に巡りきて、金剛の力あうぞうれしき。」



白口弘法大師（白口）

のうたをとなえつつ、白口の家々を一軒また一軒と説法して歩いた。

僧は、この人が信仰に厚く、弘法大師を信仰していることに感心し、立ち去るにあたって、

「吉敷の中尾というところに、大変粗末に扱われているが、靈驗あらたかな弘法大師の木像がある。これを迎えてまつてはどうか。」と話した。

その後、一か月半ばかりたった頃から、大迫の山頂で毎夜光明こうみんが輝くようになった。不思議に思った里人が、総出で訪ねてみると、松の枝に錫杖がかけられてあり、それが光っていることがわかった。

そこで、前の托鉢僧のことを想い出し、総代三人が中尾に木像を迎えに行つた。中尾の某家は、物置にしまっていた鼻も欠け、塗りもとれた古い大師像をもちだし、心よく譲ゆずってくれた。総代は、これを大切にもち帰り、立派に塗りがえて奥の院に安置した。

この弘法大師に祈願すると、どんな難病もたちまち治った。次第に噂うわさがひろがり、参詣人さんけいじんは日増しに多くなり、萩山方面からお参りがあった。三月二十一日と七月二十一日がお祭りで、出店も並ぶにぎわいだつた。（佐々並村史より）

十一 不動明王

小野山のこのあたりは、一方が川、一方は急な山で、昔はこの山が草地で野焼きをしていたために、岩がたびたび



不動明王 (小野山)

崩れて道を塞いだ。

そこで、この岩崩れがおきないように「不動の金縛り」のご霊験を願って、宝暦の頃、小野山の田中権九郎が、高野山から不動明王をいただいできて、ここにまつた。

その後は、山崩れも少なくなり、ほかの願いごともかなえられるということ、小野山の守り神的存在となった。

現在も、県内外から参詣者があり、七月二十八日に、二百二十八段登った広場で、お祭りが営まれている。

十二 大番様

昔、一匹のおおかみが、のどに魚の骨をかけて、苦しきのあまり、大声をあげて七日七夜のあいだ成川を吠えまわった。

しかし、相手がおおかみなので、だれ一人近寄る者はなかった。

ところが、狩野暢元の祖で気丈な老婆が、人々の心配をよそに、おおかみを呼び寄せ、口をいっぱい開けさせて、なんじょう(餅つきのきね)を打ち込み、のどの骨をたたき落した。おおかみは、骨がとれて大変喜んだが、長いこと骨



大番様 (成川)

がかかっていたために衰弱して、死んでしまった。村人は、これを憐んで大番様としてまつた。その後、のどに骨がささった時、その大番様に願をかけたたり、大番様のふもとで炭を焼いて、その炭を食べると、骨が落ちるようになった、ということである。

十三 逆修石



逆修石 (上長瀬)

この岩(写真右側)については、不可解なことが多いが、はっきりわかっていることからあげてみよう。

第一 この岩が、逆修石と呼ばれていること。逆修とは「生前にあらかじめ自分のために仏事を修めて冥福を祈る」ことを意味する。

第二 岩には、これまでの調べで、次の文字が刻まれていることがわかってい

る。

「寛永十一年(一六三四)(十一は元とも読める)

宇多川備後守 松誉宗須立(須は鎮とも読める)南無阿弥陀仏 光与妙寿福(寿は善とも読める)十月五日 大導日」

第三 宇多川備後守は四国愛媛県の人で、一の坂鉦山の管理人であった。

第四 一の坂鉦山は、慶長二年(一六〇一)から元和五年(一六一九)頃までが最盛期で、寛永十一年頃はすでに鉦山の終りであった。

宇多川備後守についての伝説に、次のようなものがある。

その一 宇多川備後守は、鉾山が終ったとき、この岩の川向いで、二夜三日間、はんぎり（底の浅いたらい）に、米、大豆、銭、小玉銀などをまぜ入れて、往来の人々に施をした。

その二 備後守は、数百日の間、人力を尽して鉾山を掘ったが、その甲斐もなく、あきらめて防府まで帰り、そこで宿をとった。その夜、太陽が懐に入る夢を見たので、急いで一の坂にひき返し、鉾山を掘ったところ、たくさんの銀がでた。

また、佐々並では、この岩のことを「千人まぼ」（まぼは、間歩のなまりで、坑道のこと）と呼び、次のようにそのいわれが伝えられている。

「ある日、一の坂鉾山で忌日として入坑を嫌った一人の坑夫の反対を押し切って、大多数の坑夫が入坑した。すると大坑道が落盤し、千人が一瞬のうちに死亡した。この岩は、その人達の霊を吊った跡である。」と。（広報あさひより）
文政六年（一八二三）に、夏木原茶屋溝部新九郎とその息子、下長瀬茶屋の甚四郎という者が、この岩に文字をみつけて不思議に思い解読しようとした、と風土注進案に記されている。

三百五十年前頃に刻まれたこの文字が、解明されないままで、自然の風化とともに消えて行くのだろうか。



（風土注進案のさしえ）

第七章 神社にまつわる伝説

一 貴布祢神社 (鉦切)



貴布祢神社拝殿 (鉦切)

この神社には、祭壇の中央に、貴布祢大明神、向って右に生目様、左に荒神様がまつられている。

現在の国道の上にある神社は、昭和五十二年に四度目に建てられたものである。最初の神社は、およそ四百年前に野丸岳（こんりゆう）に建立されたといわれ、現在も石垣がわずかに残っている。二番目は、古宮（ふるみや）にあった。これは一七四〇年頃の地図にも記載されている。三番目が、現在の拝殿である。この拝殿の入口の上に、鳳凰（ほうおう）に似た立派な鳥の彫刻がある。ところが、この立派な鳥の片方の足が、ある日、何者かによって鋭い刀物で切り落された。そこで、この神社のことを、「片羽神社」ともいうようになったといわれている。このことについて、次のような伝説がある。

鉦切のある人が、護身用の刀を懐に置いて、町から帰っていると、突然大きな鳥が飛んで来て、頭をかけた。そうすると不思議なことに、懐の刀が自然に

とび出して、鳥の足を切り落した。その鳥は、実は天狗てんぐだった、と。

この天狗について、元文六年（一七四一）に書かれたこの神社の由来に、大要次のように書かれている。

「むかし、鉦切の五郎兵衛という者が、夜道を帰っていると、にわかにつむじ風が吹いて天狗が降りて来た。五郎兵衛は驚いて、とっさに刀を抜いて切りかかったところ、天狗の羽に刀の先があたり、片羽を切り落した。天狗は残りの片羽でどうにか華山けさん（豊浦郡豊田町）まで飛んで行ったが、そこで力尽きて死んでしまった。

その後、天狗が五郎兵衛の夢枕に立って、

『おれは、お前に切られた天狗である。傷を負いながら華山まで飛んで来たが、傷がひどくなつてどうどう死んでしまった。ついては、おれの死骸しがいを鉦切に返して、貴布祢神社としてまつり、十一月初めの申さるの日を祭日として欲しい。』と告げた。」（萩往還より）

生目様は、目の神様で、自分の年の数だけ「目」の字を書いて供えると、目がなおる、といわれている。

お祭りは、十一月に行われていたが、現在は、十月二十一・二日に行われている。以前は、お祭りの日の夜明けに「ゆたて神楽」を奉納していたが、現在は、お祭りの日の夜に奉納している。

二六所神社

六所神社は、弘安六年（一二八三）九月二十九日、大内弘家のはからいで、熊野権現から遷座せんざされたといわれているが、そのいきさつについて、一八四五年頃の記録によると、大要次のように書かれている。

弘安三年（一二八〇）十月四日、夜八時過ぎに権現様が、大きな星となられて、山口の一の坂を越えて、香積寺門こうしやくじ



六所神社

前（瑠璃光寺）を過ぎて大内の西殿に入られ、しばらくして、今度は東殿に入られた。そして午前二時頃に、また星になられて、御屋形の西の築地^{つきじ}を越えられて、香積寺門前の高さ六メートルばかりのところを飛ばれ、一の坂を越えて、佐々並の高津の峠の森にお入りになった。これを見た高津の人々は、不思議に思った。

高津の井上三郎丸という者に、三歳になる女の子がいた。権現様は、その子に乗り移られて、「われは、熊野十二所権現なり。国家安全、万民守護のために、今ここに現われた。」とお告げになった。

このことを聞かれた大内公は、弘安六年（一二八三）、十二所のうち六所を、佐々並本郷のうち清浄^{せいじよう}の地である現在地に、本社神殿、拜殿、末社を建立され、武運長久、国家安全の祈願をとり行われた。

また、笹尾谷を社領として寄進された。

飛んで来られた十二の御神体は、次の神社にまつられている。

- 六所 六所神社（六所権現） 佐々並本郷
- 二所 高津神社（二所権現） 佐々並高津
- 一所 長小野神社（一所権現） 佐々並長小野
- 三所 明木神社（旧原権現社） 明木市

今日、佐々並に伝わる口伝と多少異なるが、熊野権現から御神体が飛来されたこと、高津に井上三郎丸という人がいたこと、十二所飛来して、四つの神社に分かれてまつられていることは共通している。

第八章 民話

一 彦六・又十郎物語

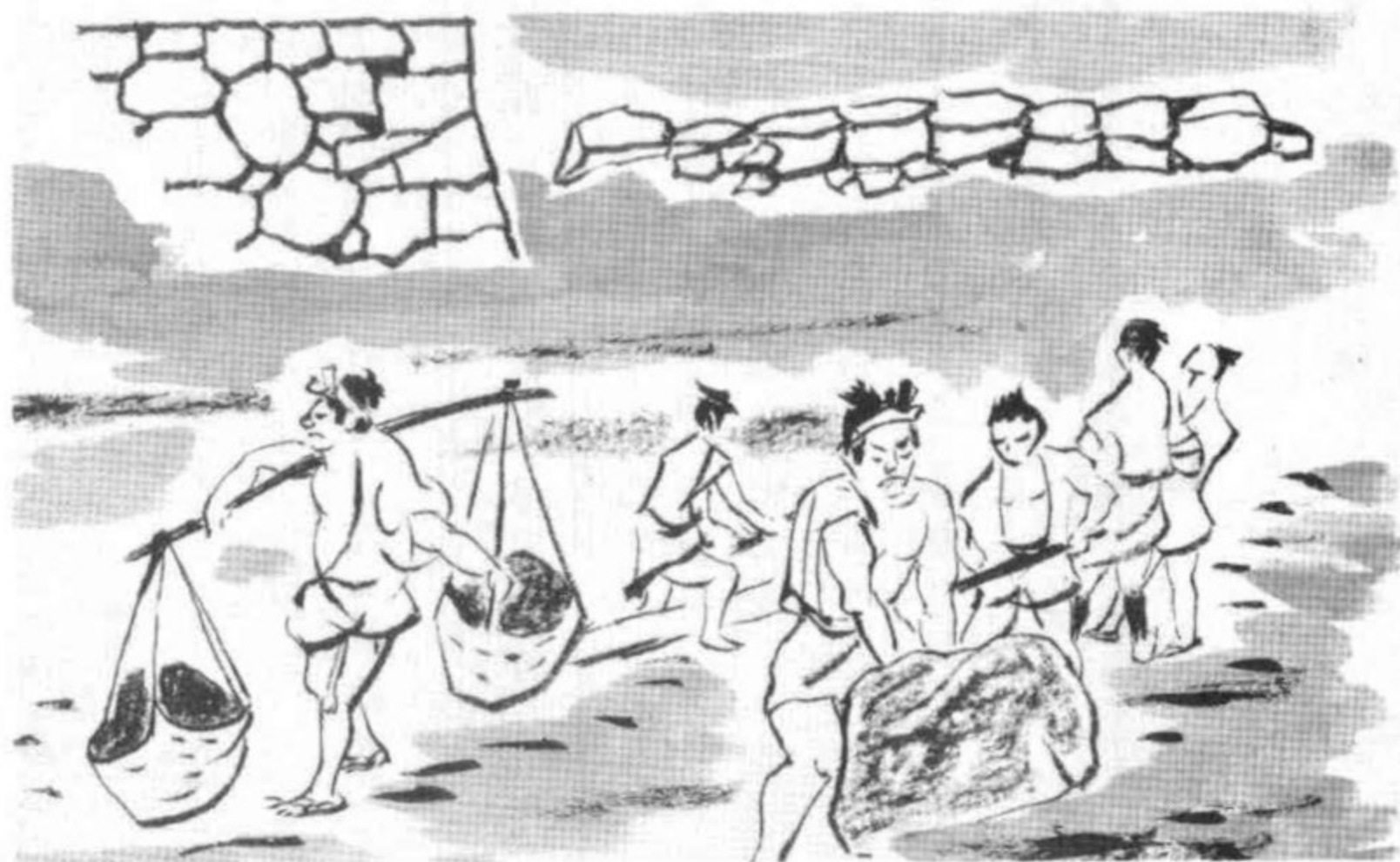
毛利の殿様が、萩にお城を造りなされるようになってから、年貢米のとりたてが、えらいきびしゅうなつてのう。村のくらしは、ひどいものじゃった。

そりゃあ、お城を造るにゃあ、ようけ^{ぜだ}銭がいるし、中国八か国におつたお武家様が、一緒に来んさつたのじゃから、その人たちにお給金もあげんにゃあならんし、しょうのないことじゃつたろう。

つくる米^こみやあ、はしからもつて行かれて、食べるもなあないし、着るもんにしても、ありゃあいけん、こりゃあいけん、ちゅうて、やかましかつた。

ええ日よりに畑に出ようと思つと、お城造りや、殿様の道づくりがあつて、仕事ができやあせんかつた。

でもものう、みんなよう辛抱して働きよつた。この辺の山あ、みんな



草が立つちよつて、夏の暑い日にゃあ、みんな刈つて、田のこやしにしよつた。冬にゃあ、奥山へ行つて炭を焼いたり、わるきを作つたり、小木やはなしばを採つて、萩に売りに行きよつた。

椿の大屋に、口屋ちゆうのがあつてのう、そこで口屋銭こうやせんちゆうて、売りに行く炭俵の数で税金をとられよつた。その役人が、また悪い奴で、村の者から、きまりよりようけ口屋銭をとつて、自分の酒代にしよつた。

昼間から酒をくろうて、赤あ顔をして、「にたあ」と笑うと、背筋が寒うなりよつた。「どねえかならんか」ちゆうて、みんな悪口ういいよつた。

慶長九年（一六〇四）に、指月山のところに、城を造ることになつたが、あの山あ、海の中に浮いた島みたいで、どろで埋めんことになあ、どうにもならんかつた。埋めるにゃあ、石垣うようけ組まんといけんかつた。

それで、城造りがはじまると、古戦場の彦さんや、菅蓋の又さんが、石垣う組みに行つた。

二人とも大男で、力が強うて、三十六貫（百三十五キロ）もあるげんのうを使う仕事師じやつたから普通の者の倍も三倍も仕事をした。

遠方からでも、彦さんと又さんの仕事ぶりは、わかるほどじやつた。

四年たつて、お城ができたとき、二人があんまりよう仕事をしたから、殿様が、

「何かほうびをやろう。」



西来寺にある彦六・又十郎の碑

つていわれたが、二人とも、

「ほうびはいらんけえ、村の者が、大屋の口屋銭を払わんでもええようにしてつかさい。」
とお願いしたそうなの。

殿様は、二人の心掛けに感心して、その願いをかなえられたちゅうことだ。

まあ、こういうことで、それからあ、村の者は、口屋のあの赤あ顔をした役人の前を素通りできるようになった。
ありがたい話ですのう。(言伝え)

西来寺の門前にある「同会 古泉城彦六 菅蓋又十郎」の碑の裏面には、「彦六、又十郎の両名が、萩城の築城に際して、大変精を出して働いたので、その賞として、二人の願いにより、明木村で薪をつくったり、炭を焼いたりして、萩に売りに行くとき、いちいちお上かみに願い出なくてもよくなった。」と書かれている。

当時は、山の木を切るにも、物を売るにも、願い出て許可を得なければならなかったようだ。口伝の内容とは異なるけれど、彦六・又十郎の二人が、自分達に与えられたほうびを、自分達だけのものにしないで、村人に分かち与えた美談にちがいはない。

なお、今日でも、毎年四月十五日に二人の供養のための法華会ほっけえが、西来寺で営なまれている。

西来寺の碑について

防長風土注進案(弘化二年 一八四五年)に、二人の二百五十年忌にあたる年に建こんりゆう立されたとあるが、古戦場にある碑には、百五十年忌にあたる年と記されている。一八四五年から二百五十年前としても、一五九五年で、まだ城ができていないから、百五十年忌が正しいのではないかと思う。

二 木村源内の化物退治

むかし、川上村の大四郎山の塔の岩のほら穴に、母ぎつねと子ぎつねが住んでおりました。山深いこのあたりでは、獲物が多く、母子ぎつねは、人間と同じように、鹿の皮をなめして敷物にしたり、冬の日のために、足袋たびを作ったりして、ぜいたくともいえる生活をしておりました。

そうしているうちに、子ぎつねは、だんだん成長して、年頃の娘ぎつねになりました。この娘ぎつねは、人間に近い生活が身についたのか、仲間のきつねを相手にせず、人間に興味をもちはじめました。

母ぎつねは、娘をいましめますが、娘はどうかして、人間のお嫁さんになろうと考えました。そして夜な夜な、村人を化ばかしては、いいよりますが、だれも相手にしません。そこで、娘ぎつねは、村人を深い谷に連れ出しては、突き落して殺していました。

そのころ、関が原の戦いに敗れた真田幸村の部下で、近江国の木村源内という武士が、家来数名とともに、佐々並の太下に落ちてきました。源内は、大そう男ぶりが良く、大きなまつげに、ぎよろりとした目、鼻筋のよく通った、みるからに精悍せいかんでたくましいお侍でした。

庵いおりもできて、仮住いの生活もようやく落ちついたある夜、源内が床に入って寝つこうとしますと、枕もとでかさこそともの音がします。うつすらと目を開いてみますと、年の頃二十前後の美しい女が、そそくさと足袋をはいておられます。そのしぐさがいかに艶なまめかしく、「はっ」と目を開いて起きようとしていますと、もう、その姿はありませんでした。そして、女のいた場所に、「鹿の玉」が一つ残されていました。それから、毎晩同じことがくり返されます。不思議

に思った源内は、このことを家来に話しますと、

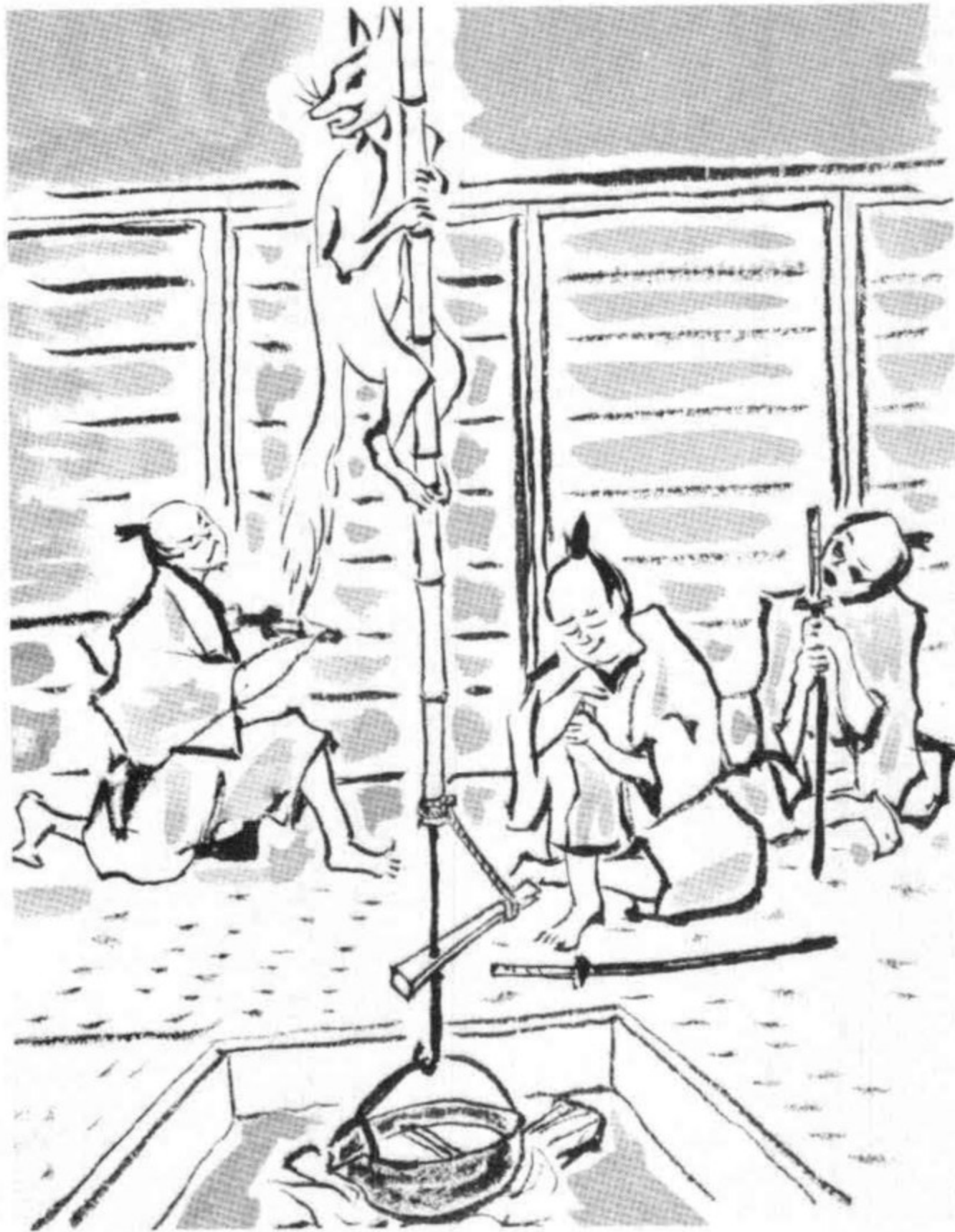
「わたしどもも、殿がお休みになると、もの音がしますので不思議に思っております。そればかりか、殿のお部屋には、これまでついぞ見たことのない『鹿の玉』が置いてありますので、これはきっと化物のしわざではないかと申しております。」と申します。

そこで源内は、次の夜、居間のいろりに火を焚かせて、家来共に見張りをさせ、自分は、刀をふとんの中にかくしもって待つことにしました。

ところが、その夜に限って、女は姿を見せません。夜もふけて、家来共も昼間のなれない畑仕事の疲れで、ついうとうととしていました。

源内も、「もう、こんなにおそく来ないだろう」と、にぎっていた刀の手をゆるめ、目を閉じました。

しばらくすると、例のかきこそという音がします。どこからともなく、女は現れて、片方の足袋をはいて、もう



一方の足袋をはこうとしています。

源内は、とび起きざま、ここぞとばかり「エイッ！」と抜き討ちに女に切りかかりました。源内の少しの油断で、女は一瞬早くとび退り、その場で殺すことはできませんでしたが、たしかに手応えはありました。

一方、居間にいた家来共も、源内の声に「はっ」と目を覚ましました。すると、一匹の大きな女狐が、いろりにかけてあつた鍋に跳び移り、じざいかぎをつたつて、天井に登つて逃げて行きます。見れば鍋の蓋に、血こんが残っています。

そこで、折からの月明かりをたよりに、血の跡を辿つて行きますと、大四郎山の塔の岩の上で、傷ついて息も絶え絶えの娘狐に、母狐が、

「親のいいつけを守つて、人間なんか好きにならなかつたら、こんなことにならなかつたのに。」と涙を流してさとしていました。

その後、村人はきつねに化かされて谷底に落ちて死ぬこともなく、平和に暮せるようになりました。

源内も、そこに立派な家を構えて永住しました。源内の死後、その武勇と徳をたたえるために、佐々並権現社の境内に、社を建て、若宮社と呼んで、毎年九月二十五日に祭礼を行なっています。(言伝え)

一八四五年頃の記録に「木村家には、女狐がもつて来た鹿の玉と、源内が切りつけたときに、狐が残した鹿の皮足袋と、その時使つた脇差一腰が伝わっている」とある。

また、大下の墓地にある古い墓に真田姓のものがあり、このことは、木村源内をはじめ、一緒に来た武士が、真田一族に關係あることを証明しているのではないか、といわれている。

三 弥三郎きつね

毛利の殿様が萩に移られて、萩と三田尻に往還ができてから、佐々並市は、宿場として大そう繁昌はんじょうしました。夜のとばりがおりる暮六ツ頃になると、江戸から帰って来られたお侍や、これから江戸へ向われる方々で、はたごは、上を下へのにぎわいでした。なかでも、毛利のお武家様の常宿である土山屋は、ひとときわにぎわっておりました。

その頃のことです。三田尻の車塚に、弥三郎という名のきつねが住んでおりました。この弥三郎は、ひどく好奇心の強いきつねで、あるとき、大勢のお武家様を、したがえて進む殿様行列を見て、あとをつけてみたくなりました。ゆっくり進む行列の、あとになりさきになりながら、つけて行きました。ときおり、仲間ちゅうげんを従えた一人歩きのお侍に出会いました。

行列が佐々並の市に着いて、お武家様が、それぞれのはたごに入って行くのを、貴布祢神社から眺めて、その夜は、神社の森で休みました。

翌日、行列は、まだ日の高い頃に萩に着きました。三田尻よりにぎやかな萩の街を歩いていきますと、田中の荒神様に来ました。と、その境内に弥三郎が、今まで見たこともないきれいな毛並の美しいきつねがおるではありませんか。一瞬、いなづまを受けたような衝撃しょうげきが、全身をはしりぬけました。弥三郎は、はやる心をじっとおさえて、女ぎつねに近づき、さりげなく初対面のあいさつをしてみました。

女ぎつねの名は、おさんといいました。話しているうちに、おさんも弥三郎が好きになりました。そこで、おさんの案内で、萩の街を見物することになりました。そして夜弥三郎は、おさんのすすめで萩に泊まりました。

翌日、二人はまた会うことを約束して、別れました。

三田尻に帰った弥三郎は、おさんのことが忘れられず、また会いたくありませんでしたが、途中どこに泊まろうかと思案しました。佐々並の貴布祢神社の森の寒さは、耐えがたいものでした。

そこで、思い出したのが殿様行列のことでした。一人歩きのお侍が、仲間を従えていたことや、行列の中の立派なお侍が、土山屋に泊ったことです。

さつそくお金を用意して、仲間をやとい、目鼻だちのどとのった気品のある若侍に化けて、萩へ向けて出立しました。佐々並に来て、予定通り土山屋に入りました。土山屋の主人は、下へも置かぬ丁寧さで、弥三郎を迎えて、上の間に案内しました。そこで弥三郎は、

「一夜の宿をお願い申すが、ちと事情があるので、仲間には別の部屋をご用意いただきたい。また、拙者の部屋の準備ができて食膳を運ばれたら、翌朝までは、一切おかまいなく願いたい。」

と、廊下での立聞きや、のぞきみを堅く禁じました。主人は、さつそく女中を集めて、弥三郎の申し出を伝えるとともに、

こうして弥三郎は、年に何回が土山屋に泊って、萩のおさんに会いに行っていました。

何年か過ぎたある日のことです。つとめはじめたばかりの女中が、弥三郎の部屋係になりました。女中は、気品あふれる若侍の部屋係りになって、心はずませて、部屋の準備をしながら、いろいろと話しかけますが、弥三郎は一言も口をきいてくれません。夕方、食膳の用意ができました。上品な口もとをした若侍が、二合近くはいつている物相のご飯を、どうして食べるか、その所作を見たいと思いましたが、女中の前では著に手をつけようとしません。

仕方なく女中は、部屋を下がりました。一旦は階段を降りましたが、どうしても見たくてたまりません。

再び、そつとひき返して若侍の部屋をうかがいました。その時、弥三郎の姿が、にぶい行燈あんどんに照らされて障子に写っていました。まぎれもなく若侍は、食事をしています。しかし、物音ひとつしません。女中は、もうこらえきれなくなりました。

どうとう禁を犯して、のぞきみをしてしまいました。これに気付かぬ弥三郎ではありません。さつと姿をかえて、宿を出て行きました。そして、二度と土山屋に泊らなくなりました。

このことがあってから、隆昌りゅうしょうをきわめていた土山屋から、時代の流れの影響もあつたのでしよう。しだいに客足が遠のいたということです。(佐々並村史より)

物相……ご飯を盛る食器、一く二合はいった。

大名行列

行列は、往還(江戸へ向うこと)、下向(江戸から帰って来ること)とも山口と三田尻に泊った。

記録に残る一番大規模な行列は、貞享元年(一六八四)吉就初下向の千六百六十三人である。その後少なくなつて、宝暦二年(一七五二)重就初入国の時は、五百六十四人となっている。大体平均千人程度であつた。(萩往還より)

四 首切れ地蔵

むかしむかし、それは萩にお城ができて五十年ばかりたった明暦の頃でございます。山口の宮野に、渡辺様と申されて、いご囀基のたいそう強いお武家様が住んでおられました。その頃、萩の法華寺で、お武家様方の囀基の会がもよお

され、渡辺様もはるばる萩までおでかけになりました。

渡辺様のお相手は、高麗左衛門という方で、この方もたいそう囲碁のお強い方でございました。お二人の勝負は、盤上に火花を散らすはげしいものになりました。勝負も終りに近づいた頃、石の置き方でとうとう喧嘩けんかとなり、高麗左衛門様が、刀に手をかけ渡辺様に切りかかれたのでございます。とっさのことで、渡辺様は、身をかわすひまもなく、その場でお亡くなりになりました。

渡辺様の下僕の源助は、このことを聞いてひどく悲しみ、せめて主人のお墓のそうじをして、お花や線香を供えようと、萩にやって参ったのです。そして、くる日もくる日も、お墓参りをしておりましたが、そのうちお金もなくなりまして、商あきないをはじめました。根が働き者の源助は、朝早くから商いに精を出しました。それでも主人のことは、いつときも忘れられず、毎日墓参りを欠かしませんでした。源助のこの忠節を、天も感じられたのでございましょう、商いもだんだん繁昌するようになりました。

そんなある日、源助は長いこと会っていない宮野村の主人のお子様のごことが、気がかりになってまいりました。また、両親のお墓にもお参りしようと思いたち、宮野へ帰ることにしました。

旅の仕度をととのえた源助は、朝暗いうちに萩を立ちました。明木の市を過ぎて、一升谷にさしかかった頃には、夜もすっかり明け、朝日をうけて若葉の露が、まぶしいばかりに光っております。いくつもの峠を越えて、佐々並の市についた時は、もう昼近くになっておりました。ここで、昼食をとることにしましたが、少しでも早く宮野へ帰ろうと思われましたので、ひろげたべんとうも、そこそこで出立しました。

そして、宮野への近道のある日南瀬にさしかかりましたとき、これまでのはりつめていた気持ちがゆるんで、どつと疲れがでました。そこで源助は、道のそばの切り株に腰をおろして休んでいますと、ついうとうとして参りました。

そうしますと、夢ともなく、現うつともなく、

「汝が休みたる下に我が形あり、掘出して道の側に建て直しなば、汝が願いも成就じょうじゆし、なお、往来の人、家名を唱え、信心なる輩やからには、その縁によつて濟度さいどせん。我は、即ち地藏菩薩なり。」と大そう威嚴のあることばでお告げがございました。

驚いた源助は、大急ぎで村人を呼んで、あたりを探しておりますと、沼の中に、頭だけの地藏尊がみつかったのでございます。

さつそく石を重ねてその上にすえ、お坊さんと呼んで供養くよういたしました。

その後、幼主も成長されて、めでたく仇討ちを果たすことができたのでございませうが、これはひとえに地藏菩薩のおかげと、その後も手厚く供養を続けたのでございませう。

これを聞き伝えた村人も、だんだんお参りするようになり、祈願も増してきたそうでございませう。このお地藏は、はじめから首がはなれていたので、首切れ地藏と申したそうでございませう。

(言伝え)

(下小木原の旧県道にも、外観がよく似た首切れ地藏がある。)



首切れ地藏 (日南瀬)

五淵が平の滝

この滝の滝つぼは、雨乞い淵あまごと呼ばれる。その昔、佐々並の村里がひどいかんばつになり、大下地区が特に大きな被害を受けた。

そこで、大下の人々は、この滝つぼの水を汲み出して、わらを焚いて天に祈願した。人々の熱意が、天に通じて雨が降った。

だが、市の人々が、自分達の地区に来る淵の水を勝手に汲み出したことに腹を立てたと伝えられている。

この淵付近の岩壁は、よく崩れ落ちた。そこで岩が落ちて水路をふさいだり、水路を見回りに来る人に落ちてけがをさせたりしないように、弘法様がまつられている。



淵が平の滝



弘法様

第九章 方言

ここに集録した方言は、明木中学校の生徒とその家族の協力を得て、昭和五十七年七月から昭和五十八年九月にかけて収集したものと、昭和三十年に佐々並村史編纂委員会によって発行された「佐々並村史」の中の佐々並方言（第二十二章）とを併せて、旭村の方言としてまとめたものである。

表記及び集録方法について

- 一 方言を一般的な方言、訛音語彙、特殊な修辭的語彙の三つに分類して集録した。
- 一 すべての方言を五十音順に集録した。
- 一 同義語は「 」、用例はへ、用例の意味は（ ）で、それぞれ示した。
- 一 共通語訳のむつかしいものについては、用例のみを掲げることにした。
- 一 無理に共通語に訳したために、ニュアンスが異ったり、意味が狭くなったりしているものも多少ある。
- 一 方言は、イントネーションを中心とした発音の仕方にも大きな特色があるが、文字表現ではそれができない。従って、文字表現だけでは、本当の感情を伝えることがむつかしいと思われるものもある。

— 一般的な方言

方言	意味
あ	
あいたあ	ああ痛い
あえる	なりものが落ちること（栗・椎の実など）
あかい	明るい
あかんべい	あざける
あがり	上がり口
あけうり	まくわうり
あけのひ	翌日
あさつばら	早期、「あさつばち」とも
あしなが	あめんぼ
あずる	あせる
あたる	中毒する
あたん	報復
あてつぼう	当て推量

方言	意味
あとうさま	
あねいこねい	
あねいに	
あねじょう	
あのそ	
あば	
あぶあぶ	
あべる	
あほんだら	
ありやあまあ	
あんぎらぼう	
あんじょう	
あんたんで	

方言	意味
お月様	
あれこれ	
あんなに	
姉	
彼の（指示）	
着物	
大きくてぶかぶかしている状態をいう。（体より大きい被服を身につけるとき用いる）	
水泳、泳ぐ	
馬鹿	
驚いたときに発する	
何も注意せずに	
兄	
貴方のものですよ	

あんとう
あんばい
い
いいえのう
いいごと
いいだや
いかい
いがく
いがる
いきらかす
いきぎ
いずい
いたらんこと
いっこ
いっきに
いっしょこた
いっそ
いっときばな

あの通り
折合い
どういたしまして
苦情
桶工
大きい
ゆでる
大声で叫ぶこと
せき立てる
草木の刺のあるもの、魚の骨
大変に
余計なこと
一緒
逸散に
一緒にすること
一切
彼岸花

いなす
いにしな
いぬる
いやあした
いら
いら
いらく
いろめ
いんだ
う
うぐし
うげる
うづく
うそこく
うだうだ
うちやあ
うっさらばい髪
うつつらかす

帰す
帰る途中、帰りかけ
帰る
①居た ②言った
毛虫
短気者
からからに乾く
顔色
帰った 「いにやった」は丁寧語
啞
穴があくこと
穴状に破れること へ穴がうづく
嘘をつくこと
くどくど
私は
乱髪
ひどく散らかしているさま

うなす
うなみ
うむえる
うるい
うんでも
うんな
え
えいやらやつと
ええ
ええころ
えき
えつと
えらい
えらめる
えろう
えんこ
お

「どつつらかす」とも
蒸し暑い
牝牛
①蒸しあがること②むし暑い
慈雨
それでも
否
漸く
よい
良い加減
谷間
やつと
骨の折れること、疲れたとき
いじめる
たくさん
河童

おいでませ
おいろしなさい
おいわい
おうごと
おうち
おうちでござります
か
おえんこと
おおけに
おおめだま
おかか
おきだち
おくれえ
おげんぎょう
おこといい
おした
おしらせませ

いらっしやいませ
座敷へ上がって挨拶する言葉、敬
せ
正月用の飾り餅
沢山、大へん
あなた、「おおち」とも
ご在宅ですか
くだらない、つまらないこと
有難う
ひどく叱られる
①母②自分の妻を呼ぶとき用いる
起きた直後
ください
物事が形式的で不熱心
多忙
「おはようございます」の簡略形
仰せられます

おちや
おちる
おったまげる
おっぱち
おとと
おどれ
おびいさあ
おへやさま
おもやい
おらあ
か
かいさ
かがち
かくつとう
かぐる
かけりごう
かしのみ
がつそう

間食
飯を釜から御櫃に移す
すごく驚くこと
尾、しっぱ 「おっぱ」とも
父
おのれ（人を罵るとき）
尼さん
老婦の隠居
共同で使うこと
俺、「うらあ」とも
皆目、まるで
鉢
木の切株
ひっかく
競走、かけくらべ
どんぐり
乱髪 「おおがつそう」とも

かど
かばち
かまう
かまち
かまる
かやーる
かるう
かんかんぜみ
かんこ
かんばれ
かんびょう
き
き
きいきかしい
きさい
きしやない
きすい

庭先
口が立つこと、おしゃべり
子供の喧嘩、強い者が弱いものを
いじめること 「かもう」とも
座敷の上り口
刑務所入りをする事
買いなされる
背に荷物を載せる
日暮蟬
袖なし羽織
霜やけ
大根の切り干し
個、固形物を数えるときへーき
気を利かせなさい
来なさい
きたない
けんのある人、又は固い人

きなる

きなんどう

きびる

きみる

きめこむ

きもやき

きやいがわるい

きやーる

きやーれ

きやあさ

きやりんご

きらす

きんかいも

く

ぐいも

気どる、かつこうをつける。

きざっぱいこと、「きなっちよる」

ども

いなご

物を結ぶこと

行き過ぎ

詰問して先方を押しつけ困らせる

不孝者

気持ちの悪いこと

来られる

来なさい、来い

①小さいこと ②僅か

おたまじゃくし

言うへ嘘をきらすななど

じゃがいも

里いも

くう

くじをくる

くそー

くねぶ

くまい

くりやーろ

ぐる

ぐるぐるもんじ

け

けえ

けえど

けたいがわるい

げつ

けっとうじん

けっどん

けつぼた

とるへ年をくうなど

詰問して叱る

「馬鹿をいうな」「あほらしい」と

同じ

みかん

来ないであろう

下さる、くれる

車輪

あり地獄

これ

けれど

胸くそが悪い「けたくそが悪い」

ども

嘔吐

馬鹿者「ほんくらほんすう」ども

毛布

尻

けない

けんけんどび

げんと

こ

こう

こうこう

こうへい

こうりもち

こうがすく

こがり

こくうな

こくうもない

こごと

ごしょうがわるい

こじろしい

こすい

ごたくをいう

長持ちしない

片足どび

もつとも

来よう

沢庵

小生意気

かき餅

腹が立つ

おこげ

ぼんやりしている

とんでもない

陰口

かわいいそう

ちよこちよこうるさい

小利口な、小才がきく

小理屈をいう

ごつつな

こつとい

ごっぼう

こつる

こなえだがた

こねえな

ごねんいり

このじゅう

こびい

こびんちやれ

こりい

こりる

ころつと

こわい

こん

こんかい

非常に、「ごおつい」「ごっぼう」

「すつごく」とも

牡牛

たいへん

せきをする

この間

こんな

入念、謝詞

先日

けち、欲ばり

小供

呼びかけ（同年輩以下の者へ）

「こりいさい」とも

①疲れる ②閉口する

すつかり

手足が疲れてだるいさま

魚の数え方へーこん・ニこんなど

①来なさい ②来ないのか

ごんごじい
ごんげどう
ごんなあ
ごんにある
ごんごう
ごんご
ごんのうば
ごんまい
ごんりんざい
さ
さあ
さい
さいこをやく
さいぜん
さいご
さかし
さし

妖怪
この野郎
この人「ごんならあ」(この人たち)は複数を表わす
ここにある
猫背
たいへん、非常に
納屋
小さい
今後いつさい
「さん」のこと へ○○さあへ
なさい へ来さいへしさいなど
干渉する
先刻
もうだめ へ貸したらさいごなど
さかさま
中途 へ喰いさしなど

さでこむ
さばく
さばけん
し
しあわした
しいさい
しいさいた
しかつてる
しき
じげ
しご
しさんせい
しさんすな
ししらさむい
しばく
しまあかす
しまう

むりやり乱暴に押し込む
散らかす
はかどらぬ「さばけぬ・さばけな
い」ども
助かった、よかった
しなさい
しなされた
張り切っている
底板
小さい部落、地下
整理
しなさい
しなさるな
肌寒い
たたく
失敗する 「しまやかす」ども
整理

しまる
しゃあない
しゃこんた
じゃまくそ
しゃんしゃん
しょうことない
じょうぎ茶碗
しょうしょうじゃー
ない
しょうねがいらん
じょじょ
しゅう
じゅうがええ
しゅむ
しらあで
じら
じらもの

氷柱
仕方がない
水車の類
邪魔なこと
早く早く
仕方ない、「しょうもない」とも
日頃使う個人にきまつた茶碗
手ごわいこと
何回言ってもわからない
草履
目下の人につける
便利がよい
①はなをかむ ②しみ透る
知るもんか
我儘、やんちゃ
小理屈をいい難題をふっかける
世間のきらわれもの

しりつけつ
じるい
しろうしい
しろもの
しろんごろん
しわい
しわく
しわぐ
じわつと
しんけい
じんごがない
じんぐら
しんどい
す
すい
すいち
すいませだつた
すいたれ

①尻 ②最後のこと
ぬかるみ
忙しい、せっかち
情婦
とやかく言う
ねばり強い
柄杓
物を持って人をなぐる
おもむろに
狂人
際限がない
大騒動
大儀な
酔っぱい
酢醤油
すみませんでした
食いやしい

すいばり
すけい
すけちよく
ずってんこ
ずてんこう
すどい
すどんきょう
すばぬける
すまる
ずんだらけ
せ
せいか
せいがない
せいで
せえ
せえな
せえや
せがう

手足にささった小さな刺
持ってこい
人がするままにじつとしている
頂上
頭の頂上
すばしこい
あわてもの
抜け落ちる
氷柱
だらしない
それか、そうか、「せえか」とも
張り合いがない、はずみがない
しないで
それ
そんな
せよ
からかう

せく
せぐ
せせくろしい
せばめる
せる
せんきょう
せんき
せんない
せんにかた
そ
そうい
そうけ
そうけ田
そうら
そがあに

腹いた
狭い所に多くの物を入れる、
また入る
こせこせしてうるさい
「せせろうしい・せせらがまし」
親兄弟を苦しめるに言う語
妬んで横どりしようとする
先き頃
強情
苦しい上に情ない
この前、このあいだ
対話の時同意する意
笊
水もちの悪い田
たわし
そんなに「そねいに」「そげえに」
とも

そぐう
そつち
そびく
それしゃ
た
だいがら
だいめん
たう
たえがたい
たとうだ
たなげる
だましに
たゆう
だらしい
だり
だんじ

配合のよいこと
親しい間の対称
引きずること
それぞれの特徴の現われた人
(善悪両方)
米つきうす
おうかた
届く へ手がたうゝなど
①有難く恐縮して言う語
②気の毒 ③はずかしい
たたむこと
物と物へさしかけて渡すこと
急に
神主、神宮
だるい
疲れが出ること
頗る

たんぼ
だんぼう
ち
ちじゆう
ちじょうじゆる
ちばける
ちやりこい
ちゆうに
ちよいちよ衣着
ちよぼつと
ちよろまかす
ちよんぎーす
ちんじに
つ
つうつうばあばあ

水溜りや池
坊ちゃん
縮れ毛
縮んでいる
あまえること
すばしっこい 「ちやちこい」とも
語の上につける肯定詞
不断着
ほんの少し 「ちびつと」
「ちよこつと」とも
ごまかす
バツタ
粉々に
①浪費する ②秘密を保たない

つかあさきれい
つくなむ
づくねる
つつっぽう
つどい
つなぐ
つのもる
つばえる
つみ
つらはり
つろうて
て
てき
てぐ
てご
てしょう
てねる
でび

遣わされよ
しゃがむ
立腹する
筒袖
さしつかえ
集める
増長する
子供が戯れること
米につく虫
いたずら
連れだつて
いろいろに使うもちあみ
叩く
手伝い
平皿
束ねる
おでこ

てれいぐれい
てんかち
でんきな
てんくら
と
どうげん
どうずく
どうでも
どえ
とかきり
どぎ
どく
としゃく
どだい
どっぺ
どどくり
どねいな
どびく

ぶらぶら息ける
頂上
一途な 「ぜんきな」 とも
信用のない人
いたずらがひどいさま
打擲する
どうしても
哇畔、土手
とかげ
山の出端
退く
薬を円く積み重ねたもの、斗尺
甚しく、全く
一番あと、最後、「どんけつ」 とも
どもり
どのような
ずるずると地面をひこずる

どひょうし

どべ

どべた

とめる

とりのす

とわん

どんびき

な

なおす

ながれひぎ

なぐれる

なして

なにしかあ

なにぬかす

なんじゃらほい

なんせ

なんじょう

大変に、非常に

泥土、一番ビリ

地面

埋める

竹で編んだ背負いかご

とどかない 「たわん」とも

ひきがえる

しまう、収める

横座り

時間を無駄にする

どうして

何の仕事をしているのか

何をいうか

何だそうなのか

なんたって

杵

なんのー

に

にいまあ

にくじ

にくじ

にこ

ぬ

ぬかす

ぬすくる

ぬすくる

ね

ねえさま

ねくじをくる

ねしこい

ねつい

ねっから

ねば

何なの、疑問を問いかえすとき用

いる

男子の呼名の下につける「にいさ

あ」「にいにい」「にい」とも

悪口 「にくつとう」とも

背負子 「にっこ」とも

怒り罵って言うことば、へ何をぬか

すかゝなど

塗りつける

若い主婦

幼児が就寝前にぐずぐずいう

さっぱりしていない

注意深い ていねい

一向に

①真綿 ②クモの巣

ねんが

の

のうくれ

のぞける

のどまめ

のふうどう

のんこ

は

はあ

はありゃあねえ

はえご

ばかたれ

はしる

ばしょ

はたく

はだけ

棒をなげ相手の棒を倒す子供の遊

び

息け者

差出すこと

のどぼとけ

ずぶとい、粗野な、横着

小僧、子供

もはや、「はあすんだか」など

さあねえ

鮓 「はえんご」「はえんぼ」とも

馬鹿野郎

神経質な痛み

都会

扇ぐ

裸 「はだかんばち」「はだけっぱ

ち」とも

はつくしよ

ばったり

はなえる

ばばゆい

はぶてる

はやごう

はようおそうに

ばる

はんどう

はんぶた

ひ

びいずる

びいたれ

ひいりこ

びしゃく

ひずり

ひちぶ

くしゃみ

たくさん一面に

始める、仕度をする 「はなわる」

とも

まぶしい 「ばばいい」とも

むくれる

早く走る競走

早計に

する へ小便をばる」など

水かめ

半分ずつ 「はんぶんた」とも

びーびー泣くこと

泣き虫

羽子

たたく

はこべ

守宮ヤマトリ

ひつえる
びつたれ
ひてい
ひどう
ひとくされ
ひのきだま
びびる
ひわる
ひんず
びんちやく
ふ
ふうたれ
ふがわるい
ぶくり
ぶつぶつ
ふような
ふり
ふん

つぶれる、へこむ
不精者（特に女性の場合）
一日
甚しい
ずぶぬれ
熱狂
失敗をおそれておどおどすること
撓む
余計
頬
なりふり
運が悪い
雨降りにはく高下駄
小言、不平
腰が重い
はずみ、勢いをつける
相手の言葉に答える軽蔑の語

へ
へい
へい
へぐり
へこ
へたら
へち
べべ
ほ
ほいで
ほいなら
ほうくる
ほうさら

その、それ、「へえ」とも、
へいかね・へいたら・へいなら・
へえだけ・へえで・へえでもな
ど
仔牛
釜の底につく煤
腰巻、ふんどし
そしたら
ほたん
着物
それで
それなら「ほげなら」「ほんなら」
「ほな」「ほいたら」とも
投げる「ほうたる」「ほうる」と
も
なんとなく

ほうさあ
ほうつくない
ほうぼう
ほう虫
ほくつとう
ほぐる
ほげな
ほげる
ほてこう
ほぼら
ほろける
ほろつく
ほんち
ま
まあ
まあでや
まあよういわん
まもうに

僧
きたない 「ほうとくない」とも
かぼちゃ
かめ虫
木の棒
牛・山羊などが角で突くこと
馬鹿な、そんな
欠ける
かさご(魚)
もっこ(番)
落ちること
ふくろう
糞
対等の男の名の下につける呼称
驚いたときに発する語
あきれてものが言えない
完全に

まるげる
まんまあさま
み
みい
みしゃげる
みてえなそ
みてる
みみご
みゆう
みんなし
む
むえる
むさい
むしように
め
めいたんご
めぐ

丸くなってころんだり横にごろご
ろ転ぶときにいう
神仏様
見よ
砕ける 「めしゃげる」とも
みたいなもの
無くなる
耳あか
見よう
みなさん
むし暑いこと
長持ちする
一途に
めだか 「めえたご」とも
茶碗など入れるかご

めんどろくない

も

もとうらん

ももぐる

ももたぶら

もやい

や

やあらしい

やえい

やがれ

やけはり

やし

やだれ

やちもない

やでない

やといと

やねこい

醜い、恥になる

ぐずぐずしてはかどらない

もみくちやにする

太腿 「ももたぶ」とも

共同物

きたない、いやらしい

やわらかい 「やおい」とも

憎み罵る語 へくたばりやがれ

など

やけど

ずるい、いんちき

軒下

労して甲斐のない

うるさい

仕事に雇う人

①性質のねばねばしたこと

やれ

やれそら

やれに

やれん

やんがて

ゆ

ゆうな

ゆうや

ゆるい

よ

よいたんぼ

よう

ようさけない

ようせん

ようだ

②仕事の困難な場合にいう

たいへん へやれ暑い・やれ痛い

など

直ちに

沢山に

どうにもならず困った時にいう

他日

ゆつくりとのろい

昨晚 「ゆんや」とも

いろり

酒に酔っている人

よくは へよう行かん・ようせん

など

濡れたり穢いものにふれた感じ

よく出来ない

やんだ へ雨がようだ

よくどうがみ

よこつぱち

よたれもの

よだるひき

よばれる

よぼう

ろ

ろく

わ

わいく

わきやあわからん

わや

わやく

わらをたく

欲深者

横向き

落魄したもの

夜遅くまで起きている人

ご馳走になる

伝い漏れる

平坦

いたずら、わるさ 「わやくう」

ども

わけがわからない

無茶

卑劣なしぐさ

多数集って雑談する (油を売る)

二 訛音語彙

ああぬく

あいしろう

あぎ

あきやあ

あぎよう

あくつとも

あける

あすぶ

あちい

あつくろしい

あまんじやく

あみやあ

あるまあ

あわえ

①あおむけ、仰向く ②期待はず

れ

あしらう

顎

①明るい ②赤い

あげよう

悪党、悪人

飽きる

遊ぶ

暑い、熱い

暑苦しい

あまのじやく

甘い 「あめい」とも

あるまい

淡い

あんまし

いぐる

いけん

いごく

いしがえし

いちんち

いっこも

いっちゃん

いっぴや

いび

いややがあ

いんまがた

ええ

えかろう

あんまり、あまり

扶る

いけない

動く

意趣返し

一日中、終日

ひとつも、少しも

一番

いっぱい、たくさん

指

いやだなあ

いまがた、先ほど

よい、いい、へええけん(よいから)

へええもん(よいもの)など

よかろう、よいだろ

えげちくない
えれる
えんぺつ
おおけな
おかさん
おごる
おごつそう
おしごみ
おせえる
おせえ
おとさん
おとどい
おなし
おのし
おまい
おもたえ
おもれい

えげつない
入れる
鉛筆
大きな
お母さん
怒る、叱る
御馳走
押込、強盗
教える
遅い
お父さん
兄弟
同じ
おぬし
おまえ 「おまあ」「おみやあ」
「おめえ」とも
重たい
おもしろい

おりやある
かあら
かいもん
かいる
かごむ
かつける
かった
かべ
かまぶこ
かやす
からせ
かりい
かれい
きいつける
きちょうめな
きによう
きやある
きやある

おりやる、いらっしやる
瓦
買い物
帰る
屈む
駆ける、走る
借りた
徴
かまぼこ
ひっくりかえす
芥子
軽い
辛い
気をつける
きちょうめんな
きのう
蛙
帰える 「けえる」とも

きやあらしい

ぐいみ

くさあ

くすばいい

くすぶる

くまんばち

けえな

けつね

けつる

けえい

ござります

こそばいい

こんだあ

さおぐ

さびい

さわ

しもうた

かわいらしい 「きやわいい」

とも

ぐみ 「ぐいめ」とも

臭い

こそばゆい

くすぐる

熊蜂

こんな

狐

ける

恐い 「こええ」とも

ございます

こそばゆい

今度は 「こんつき」とも

騒ぐ

寒い 「さびい」「さみい」とも

竿

しまった

しゃつぼう

じょうり

しんな

すぐい

すっぱかす

せばい

そろうつと

そんでもって

だいしょう

だいめん

だけんど

たつける

たのうだ

だぶ

だりい

だんまる

ちい

しゃつぽ、帽子

草履

するな 「すんな」とも

すぐ(直) まっすぐな

すっぱかす

狭い

そつと、そろそろと

そんでもって、それだから

「ひやかから」とも

多少

だいぶん 「だえめん」とも

だけど

哮る、大声で呼ぶこと

頼んだ

溜む、古池、水溜り

だるい

黙る

対、同じ

ちそ
つおい
つづ
つもうだ
つらかす
でえきらい
できやあ
でに
てんぐりあえる
でんでんむし
てんば
でんぶ
といい
どっか
とんがらし
とんぎる
なあ
なあーん？

しそ
強い、「つえい」とも
唾
つまんだ
散らかす、乱雑にする
大嫌い
大きい、「でっかい」とも
銭
でんぐりかえる
でんでんむし、かたつむり
おてんば、おせっかい、出過ぎ娘
全部
遠い
どこか
とうがらし
尖る
無い、「にやあ」とも
なーに？ 尋ねる時に用いる

なん
なんち
なんぼう
にいな
にえい
によう
ぬきい
ぬりい
ねじくる
ねぶたい
ねらむ
のうなる
のれい
はええ
はきもん
はさる
はしかい

何
何日
なんぼ、どれほど、何程
蜷、「にら」とも
におい
寝よう
ぬくい（温い）、「ぬっくい」とも
ぬるい（温い）
ねじる
眠たい
にらむ
なくなる
のろい 「のれえ」とも
早い、「はえい」とも
履物
はさまる
はしかい、せかせかして落着がな
い

はよう
ひいつく
ひいる
ひがないちんち
ひこじる
ひさあに
ひでい
ひてる
ひとつも
ひやつくり
ひんち
びんぶくま
ふいきん
ふくろび
ふてい
ふてる
ふんと
へんくう

早く
ひつつく
蛭
ひがないちにち、一日中
引きずる 「ひこずる」とも
久しゆうに
ひどい、「ひでえ」とも
捨てる
一つも、少しも
しやつくり
日にち
びんぶくま、肩車
布巾
綻び
太い
捨てる
本当
偏窟

ほうかんむり
ほうたらがし
ほしゆうない
ほせえ
ほとくら
ほんてえや
まっこと
まひげ
まんご
みしる
みど
もおった
やいとう
ゆお
ようでくる
ようなべ
よっぼど
よめじょう

ほうかむり
ほつたらかす
ほしくない
細い
ふどころ
本当だ
まこと、本当
眉
孫
むしる
みぞ
戻った
やいと、灸
魚
呼んでくる
夜なべ
よほど
嫁女、嫁

よろしゅう

わち

わりい

よろしく

わちき、私

悪い

三 特殊な修辭的語彙

くありましたの

くあります

くいっちゃ

くいね

くの

くいや

くいよ

くえー

くかいね

くがね・くかや

くきやあ

くきやあね

くきやいのう

へお早ようありましたのへ(早くおいでになりましたね)へご苦労でありましたのへ
(ご苦労でございましたね)など

くですね へそうでありますへあつうありますへ(暑いですね)

くなさい へきいっちゃへ(来なさい)へしいっちゃへ(しなさい)

へあるいねへ(あるよ) へしいねへ(しなさい)など

へ行つたいのへ(行つたよ) へそれいのへ(そうだね)など

へやめいやへ(やめろよ) へせいやへ(しなさいよ)など

くなさい へ来いよへ(行きいよ)

疑問詞 へなにえーへ(本当えー)

くかね へほんとかいねへ(おつてかいね)へ(在宅かね)

へ知らんがねへ(知らないよ) へこの方がええがねへ(この方がよいですね)

へ知らんがやへ(この方がええがや)とも

へわきやあへ(若い) へなんきやあへ(何か、どうしたのか)など

くですか へなんきやあねへ(ええきやあね)へ(よいですか)

くかねえ へあるきやいのうへ(あるかねえ) へ本当きやいのうへ(本当かねえ)

くけいのう

くけえ

くけえね

くげな

くげんな

くござります

くさある

くさい

くさいの

くされん

くされ・くさん・くさんせ

くさんな

くしい・くしいさあ・

くしいの

くしいさいる

くじゃあ

くじゃから・くじゃけえ

へそうけいのうへ(そうかいね) へ早よう行くけいのうへ(早く行くからね) など

へかしけえへ(賢い) へそうけえへ(そうかい) など

くからね へ帰るけえねへ行くけえねへ

くそうだ へあつたげなへしたげなへ

へこげんなへ(このような) へそげんなへ(そのような) へあげんなへ(あのような)

へどげんなへ(どのような) こそあど系のことは

くございます へおはようござりますへ寒うござりますへ

くされている へ言いさあるへ(言うておられる) へ載せさあたへ(載せられた)

へくれさいへ(ください) へしいさいへ(しなさい)

くなさいよ へ待ちんさいのへ(待っていないなさいよ) へ来んさいのへ(来なさいよ)

くられない へきいされんへ(来られない) へやりされんへ(やられない)

くなさい へ食いされへ(見いさんへ) へ乗りさんせへ

禁止を表す へいいさんなへ(言うな) へしいさんなへ(するな)

くしなさい へはよしいへ(早くしなさい) へ手伝いしいさあへ

へ運動しいのへ

くされる へ勉強しいさいるへ(旅行しいさいる)

くのだ へ行くんじゃあへ(行くのだ) へそうするんじゃあ (そうするのだ)

くだから へそいじゃからへ(それだから) へへいじゃけえへ(それだから)

くじやった

くじゃねえ・くじゃのう

くじやろう

くしゅうしい

くしょうかあ・くしょうや

あ

くしよる

くじよる

くすりやあいけんど

くするそあ

くするそ・くするほ

くするん

くすんな・くすんないや

くせい・くせいや

くせんそに

くせんにああ

くそ

くしました へ言うてじやったく(言われました) へしてじやったく(されました)

くですね へええ天気じゃねえく(よい天気です) へ雨じゃのうく

くでしよう へええじゃろうく(よいでしよう) へしてじゃろうく

くしなさい へおとなしゅうしいく

くしよう 勧誘を表わす へ縄飛びしようかあく へ野球しようやあく

くしている へ勉強しよるく へ運動しよるく

くでいる へ住んじよるく へ遊んじよるく

くすればいいけれど へ合格すりやあいけんどく へ優勝すりやあいけんどく

くするのは へけんかするそあく へ運動するそあく

くするの へ旅行するそく へ買物するほく

くのですか へどねいするんく(どうするのですか) へ何するんく(何をするのですか)

か)

くするな 禁止を表す へけんかすんなく へ病気すんないやく

くしろ くせよ (命令) へ勉強せいく へ手伝いせいやく

くしないのに へええことはせんそにく(よいことはしないのに) へ病気せんそにく

くしなくては へ運動せんにああく へ手伝いせんにああく

へこのそく(これ) へそのそく(それ) へあのそく(あれ) こそあと系のことは

くぞい・くぞよ

くそいや

くそか

くそも

くだい

くだった

くだらけ

くたん

くだんよ

くちまう

くちやあ

くちやあ

くちやあいけん

くちやげる

くちやる

へ泳ぐぞいへ走るぞよ

くのだ へ勉強するそいやへいぬるそいやへ帰るのだ

くのか へ好きなそかへせんそかへしないのか

くのも へ書いたそもへ行ったそも

くよ へ知らんだいへ知らないよ へおらんだいへ居ないよ

くなかった へわすれだったへせだったへしなかったへねだったへ眠らなかつた

くばかり へ草だらけへ石だらけ

くたの へどうしたんへ見たん

くのよ へ遊んだんよへ済んだんよ

くてしまう へやっちまうへ行っちまう

くなさい へやめれちやあへやめなさい へしいちやあへしなさい

くと言うに へ出るちやあへやるちやあ

くしてはいけない へ運動しちやあいけんへ行っちやあいけん

くてあげる へ聞いちやげるへ見ちやげる

くてやる へ言うちやるへしちやる へ「くちやった」へ「くってしまった」へなぐつ

ちやった へ「くちやれ」へ「くてやれ」へ「見ちやれ」などは変形したもの

くちゆうそいの・くちゆう

たら

くちよきさいやあ・

くちよきんさい

くちよく

くちよつてえよ

くちよつてかね

くちよらあ・くちよらあや

あ

くちよられん

くちよらん

くちよる

くちよるん

くつかされ・くつかさい

くというのに へええちゆうそいの(よいというのに) へいけんちゆうそいの(いけないというのに) へはいれちゆうたら(入れというのに)

くでおきなさいよ へ勉強しちよきさいやあ(へ仕事しちよきさいやあ) へ言うちよきんさい(へ書いちよきんさい)

くておく へ退いちよく(へ書いちよく) 「くちよいた」(くておいた) へ取っちよいた(くちよきい) (くておきなさい) へ待っちよきい 「くちよけ」(くておけ) へ練習しちよけ 「くちよこう」(くておこう) へ話しちよこう(くちよこう)などは変形したもの

くておいてよ へやっちよつてえよ(へ言うちよつてえよ)

くておられますか へ知っちよつてかね(へ聞いちよつてかね)

くしているよ へわかつちよらあ(へしちよらあやあ)

くておられない へやっちよられん(へ見ちよられん)

くていない へ売っちよらん(へ買うちよらん)

くている へ降っちよる(へ笑っちよる) 「くちよれ」(くていろ) へ見ちよれ

「くちよれん」(くてはおれない) へ見ちよれん(などは変形したもの)

くているのですか へ何、言うちよるん(へ何、書いちよるん)

くください へ手伝うてつかされ(手伝ってください) へ貸してつかさい

くつつた
くで・くでえ・くでえ
くていや
くてか
くですいの・くですのう
くでな
くでの
くでよ
くてん
くど
くどいの
くともえ
くどる
くないと
くなされ
くなそ・くなほ
くにああ
くにやあならん

くずつ へひとつつつた へひとつずつ へふたつつた へふたつずつ
くよ 勧誘を表す へ行こうで へ痛てえ へ痛いよ へ待とうでえ
くしておくようにということです へ書いちよけていや へしちよけていや
くですか へおってか へ在宅ですか へ行ってか へ行ってですか
くですね へよかったですいの へええ天気ですのう
くよ へわかったでな へ見たでな
くなんです へそうでの へ本当での
くだよ へ嫌でよ へ好きでよ
くなさい へどいてん へのきなさい へ書いてん へ書きなさい
くよ 強意を表す へ行くど へするど
くということす へ行くといの へするといの
くですよ へやるともえ へやってですよ へ駄目ともえ へ駄目ですよ
くている へ知つどる へわかつどる
くでも へ本ないと読もう へめしないと食おう
くなさい へあがりなさい へ座りなされ
くである へ嘘なそ へへなほ へそうである
くなければ へできんにやあ へ出来なければ へせんにやあ へしなければ
くねばならない へ勉強せんにやあならん へ行かんにやあならん

くねい・くねえ

くねえな

くねんとう

くのう・くのんた

くのうて

くへん

くほか

くまあ

くみい・くみいさい

くみやあ

くやあ

くない へ危ねいへしょうもねえへ（仕方がない）

へこねえなへ（このような） へそねえなへ（そのような） へあねえなへ（あのような）

へどねえなへ（どのような） こそあど系のことは

へこねんとうへ（こういうもの） へそねんとうへ（そういうもの） へあねんとうへ

（あのようなもの） へどねんとうへ（どのようなもの） こそあど系のことは

終助詞「ね」に相当する語 へよう降りますのうへ（よく降りますね） へええ天気じ

やのんたへ（よい天気ですね）

くなくて へそうではのうてへあれではのうてへ

くない へわからへんへ知らへんへ

くのか へせんほかへ（しないのか） へするほかへ

くないことにしよう へ行くまあへ（行かないことにしよう） へすまあへ（しないこ

とにしよう） へいうまあへ（言わないことにしよう）

くみなさい へ言うてみいへ聞いてみいへ へいっちみちさいへ（行ってみなさい）

くまい へうみやあへ（うまい） へあみやあへ（甘い） へこみやあへ（こまい） へせ

みやあへ（せまい）

聞いたことに対してもう一度念を押す（確認）時に用いる へ行ったやあへ（行ったの
か―相手からどこそこに行つたということ聞いたのちにそれを念押しする）

くやあね

くくやあせん

くやが

くやった

くやろう

くよう

くよう

くよる

くらあ

くらんにやあ

くりい

くりやあ

くりやあ

くりやあせん

、ましようよ 勧誘を表す へ帰ろうやあねく (帰りましようよ) へ遊ぼうやあねく

否定を表す へききやあせんく (聞きはしない) へ読みやあせんく (読みはしない)

くです へそうやがく へこれやがく

くでした へそうやったく へ損やったく へ来やったく

くでしよう へ嘘やろうく へいうたやろうく (言ったでしよう)

相手に呼びかける時に用いる へねえさまようく へにいさまようく

くよ 強意を表す へあいたようく (ひどく痛いときにいう) へ寒いようく (ひどく

寒いときにいう)

くている へ言いよるく (言っている) へ走りよるく (走っている)

く等・くたち・複数を表す へあんたらあく (あなたたち)・へうちらあく (私たち) へお

みやあらあく (おまえたち)

くなくては へ守らんにやあく へがんばらんにやあく

くなさい へ取りいく へ借りりいく へおりいく (居なさい) へ入れりいく (入れなさい)

くれば 仮定を表す へなけりやあく (なければ) へありやあく (あれば)

へこりやあく (これは) へそりやあく (それは) へありやあく (あれば)

へどりやあく (どれは) こそあど系のことば

くません へありやあせんく (ありません) へすりやあせんく (しません)

へいりやあせんく (要りません)

くわあやあ

くんしゃい

くんだけ

くんとう

くんな

くんに

くのに　へええわあやあ　（よいのに）

へ悪いわあやあ　（悪いのに）

くなさい　へ来んしゃい　（来なさい）

へ遊びんしゃい　（遊びなさい）

へくんだけ　（これだけ）

へそんだけ　

（あんだけ）　（あれだけ）

へどんだけ　（どれだけ）

こそあど系のことは

へこんとう　（こんなもの）

へそんとう　（そんなもの）

へあんとう　（あんなもの）

へどんとう　（どんなもの）

こそあど系のことは

禁止を表す　へ見んな　（見るな）

へすんな　（するな）　へくんな　（来るな）

へこんに　（ここに）

へそんに　（そこに）

へあんに　（あそこに）

へこーんに　へそーんに　へあーんに　とも

こそあど系のことは

参考資料

一 地名由来

防長地下上申（寛保三年 一七四三年）に、地名の由来が記されているので、参考に紹介する。

○明木 昔、中村という所に、殿様がまだ安芸（広島）におられる頃、土地御再検（田畠等の面積を調べること）の命が下った。こまかく記入した御帳を整えて一番に提出したところ、ごほうびをいただいたうえに、「安芸埜」という名をこの村にくださった。ところが、「あきらち」という名は、村人にとってなかなかいいにくくて、自然に「あきらき、あきらき」というようになり、文字も「明木」をあてるようになった。

○堂尾 山の尾根の先端（尾崎）に、地藏堂があるので堂尾という。

○権現原 権現社があるので権現原という。

○蔵屋 藩の御米蔵があったので蔵屋という。

○小野山 美祢郡の小野村というところのものが、ここに来て土地を開いたので小野山という。

○新切 ここは深山で、新で道筋を切り開いたので新切という。

○下切 昔、紀伊国から杉山次郎右衛門という人が、ここに来て住むようになり、梶などの下ぐり（下切り）をしたので、下切という。



地名由来となった堂屋の地藏だろうか

○佐々並 地下上申には「いい伝えなし」とあるが、風土注進案には、大要次のように記されている。

長門名所雜記に「能因歌枕に言う長門国ささなみの里は、椿郷内つばきごうないにあり……萩より四・五里ばかり南の方の川上（川の上流）にある」とある。また、文禄二年（一五九三）吉見元頼が朝鮮に渡るとき、三月八日に津和野を立ち、十日にささ波にお着き、とある。これらのことから、佐々並の地名の由来は、はっきりしないが、古代より
の地名と思われる。（能因法師 平安時代の歌人 九九八年〜一〇五〇年）

○夏木原 ここは深山でなつきが多く、九月末から紅葉となり、大変見事だが、冬になると落葉して、木のある様子もなくなるので、人々は、夏に木の立つ原かな、と行って、なつきが原といていたが、今は、なつきはら、と
いつている。

○長瀬 この川は、瀬が多くて、水の上よどむ所がないので長瀬という。佐々並にもう一か所あるが、これも同じ心
である。

○うばが原 昔、ここに一人暮しの姥うばが住んでいた。ある日、一人の男がやって来て、自分は主人のごきげんをそこ
ね、すでに手うちになるところを、家内の情でここまで逃れて来た。どうか情をもって、しばらくかくまってほ
しい、と頼んだ。姥は頼まれて五十三日間かくまったが、家が道のそばだったので、近くの山に小屋を作って、
そこでかくまった。それから、姥の家のあたりを姥が原というようになった。

○日南瀬 佐々並のここは、東南を受けて暖かい所なので日南瀬という。

○落合 昔、ここで木を切つて製材するため、各地からたくさんの人が集った（落ち合った）ので、落合という。

○百池（首切地蔵の所） 昔、この池に川鳥がいるのを通行の者が見つけ、そばにあった石をひろって投げようとし
たところ、腰にさげていた銭ぜにを落とし、それをひろいあげて、そのまま投げた。そうすると銭は池に沈み、鳥は飛

び立って逃げた。その銭が百あるということで百池という。

○千持峠 昔、ここに大きな桧ひのきがあった。大内様が、佐々並の天下に阿弥陀堂をお建てになるとき、この桧を切つて建てるようにいわれた。その時、この木を千人で運んだということで、せんもちが峠たおという。

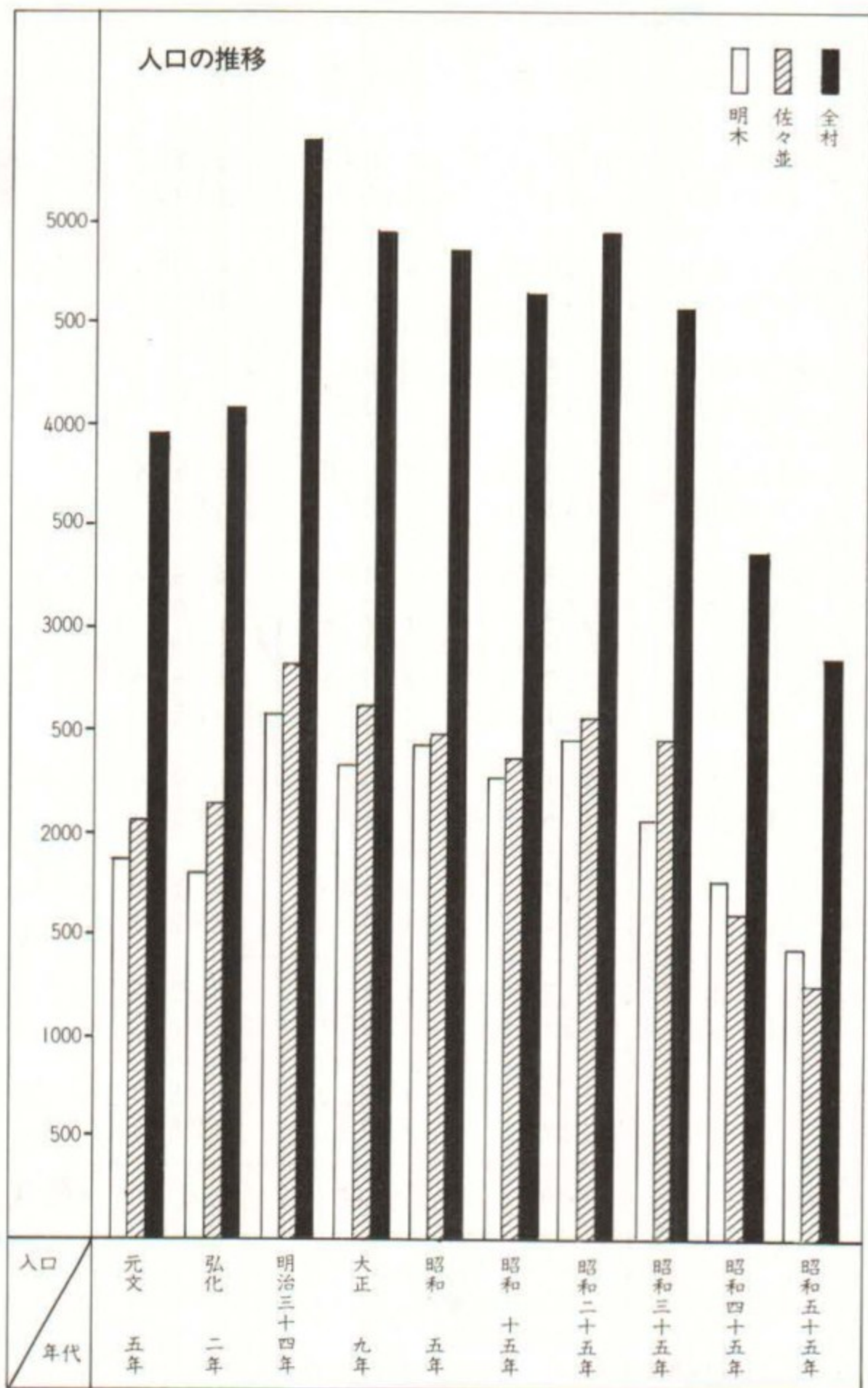
○涼木 往還のそばに大きな松の木があった。通行する人が、その木の陰で休み、暑さをしのいだということで、その時から、すずみ木というようになった。

○中の峠たお この峠は、明木村と佐々並村の境にあるので中の峠という。また、一説には、明木から佐々並の間に、千持か峠、鉾切の峠があり、その中にあるので、中の峠というともいわれている。

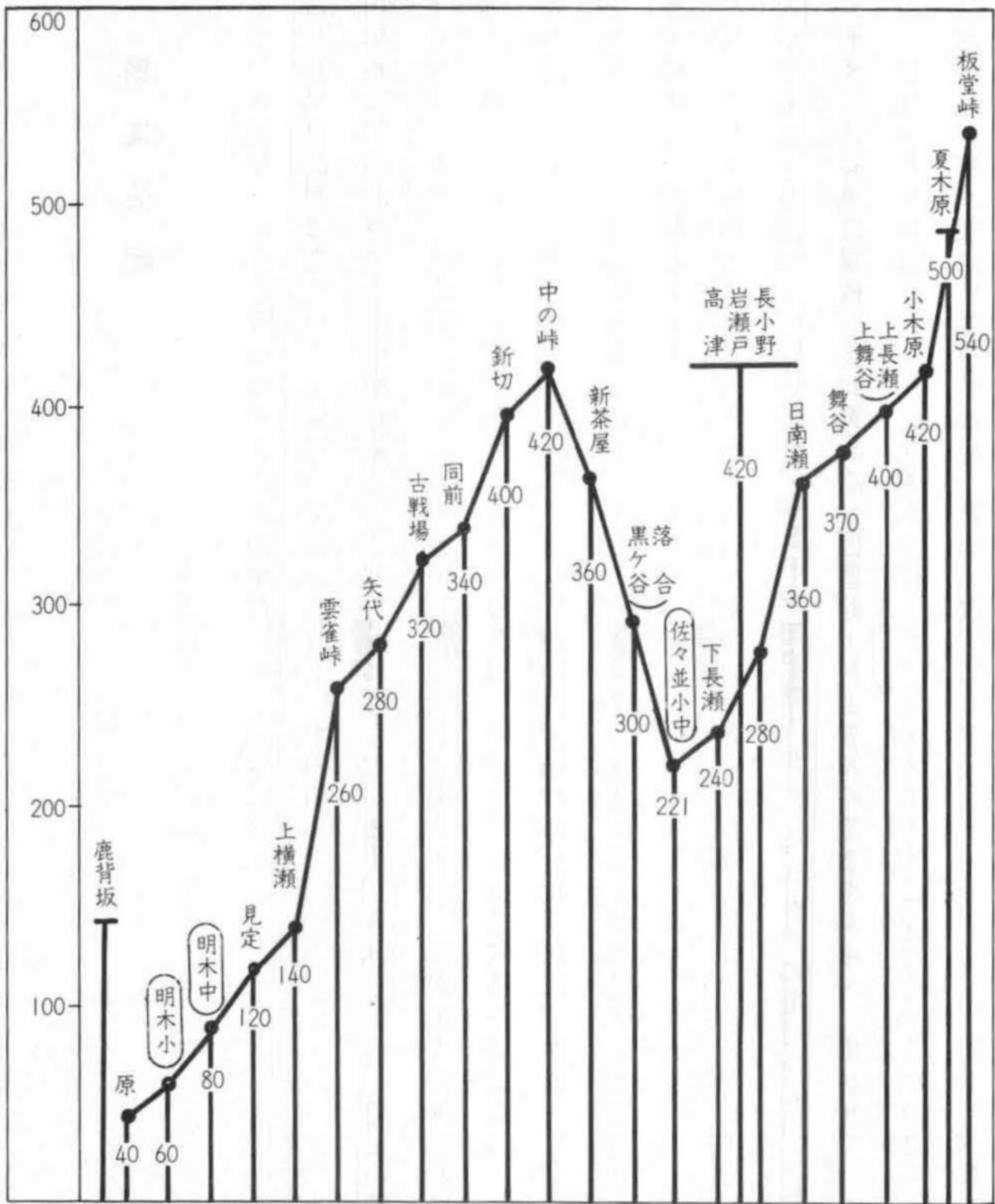
年 代	明 木	佐々並	合 計
元文5年 (1740)	1,955 (437)	2,037 (455)	3,992 (892)
弘化2年 (1845)	1,883 (418)	2,169 (403)	4,052 (821)
明治34年 (1901)	2,547 (479)	2,834 (530)	5,381 (1,009)
大正9年 (1920)	2,319 (433)	2,660 (488)	4,979 (921)
昭和5年 (1930)	2,376 (437)	2,498 (471)	4,874 (908)
昭和15年 (1940)	2,297 (414)	2,356 (443)	4,653 (857)
昭和25年 (1950)	2,418 (460)	2,541 (464)	4,959 (924)
昭和35年 (1960)	2,168 (444)	2,407 (478)	4,575 (922)
昭和45年 (1970)	1,784 (417)	1,595 (397)	3,379 (814)
昭和55年 (1980)	1,471 (395)	1,340 (373)	2,811 (768)

備 考

- 1 () は戸数を示す。
- 2 1740年は、地下上申による。
- 3 1845年は、風土注進案による。
- 4 1901年は、防長風土誌による。
- 5 1920年以降は、統計あきびによる。



三 地形断面図



備考

- (1) 標高は、50,000分の1国土地理院の地形図によった。
- (2) 各地区の中間点を基準とした。

編集後記

ふるさとの訛なまりなつかし 停車場の人ごみの中に そを聞きにゆく

かにかくに渋民村しぶたみは恋しかり おもいでの山 おもいでの川

石川啄木は、ふるさとをなつかしんで、このように詠よんでいます。うれしい時、悲しい時、ふと思い出されるのがふるさどです。わたしたちは、わたしたちを育はぐんでくれたふるさどに、心の寄り所を求めます。

ふるさと旭。そのふるさとで、わたしたちの祖先は、どのように生きてきたのでしょうか。

この本は、ふるさと旭の学習に役立ててもらうために、旭村の史跡、伝説、民話、方言などを収録しました。この本を手掛りにして、さらに学習を深め、身近かなところにあるいろいろなものの歴史を調べ、わたしたちの祖先の英知と努力のあとを理解してください。

そして、これからの旭の進むべき道、これからの自分達の生き方の指針をみいだして欲しいと思います。

この本の編集にあたって、元佐々並中学校長原田卓雄先生が、四年有余の歳月をかけて執筆された旭村史をはじめ、佐々並村史、山口県文書館、山口県立山口図書館・萩図書館の蔵書を参考・引用させていただきました。

また、元旭村長原田謙三氏、同児玉勇氏をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。

挿絵を、豊浦町立豊浦中学校長山県一良氏に描いていただきました。ここに記して深甚なる謝意を表します。

編集委員会

引用文献・資料

- | | | |
|----------------|--------|------------|
| 旭村史 | 昭和五十三年 | 旭村長 大石博英 |
| 佐々並村史 | 昭和三十年 | 山口県阿武郡佐々並村 |
| 防長地下上申 | 昭和五十五年 | 山口県文書館蔵 |
| 四 山口県地方史学会 | | |
| 地下上申絵図 | | 山口県文書館蔵 |
| 防長風土注進案 | 昭和三十九年 | 山口県立山口図書館 |
| 第二〇卷 | | |
| 當島宰判 | | |
| 歴史の道調査報告書(萩往還) | 昭和五十六年 | 山口県教育委員会 |
| 山口県文化史年表 | 昭和四十三年 | 山口県 |
| 公儀所日乗 毛利家文庫 | 十九日記 | 山口県文書館蔵 |
| 四 三十六の一 | | |
| 有故雑文 毛利家文庫 | 十六叢書 | 山口県文書館蔵 |
| 三十九 十二の一 | | |
| 明木における萩の乱 | | 児玉 勇 |
| 秋良真臣日誌 | | 山口県立山口図書館蔵 |
| 防府史料第十三集 | | |
| 吉田松陰入門 | 昭和三十年 | 山口県教育会 |
| 幼児の見聞 | 林 茂香著 | 萩図書館蔵 |
| 日本を知る事典 | 社会思想社 | 山口県立山口図書館蔵 |
| 防長風土誌 | 明治三十八年 | 山口県立山口図書館蔵 |
| 広報あさひ | 昭和五十二年 | 四月十五日付 |
| 統計あさひ | 昭和五十五年 | 旭村 |

ふるさと旭

昭和六十年 三月二十日 印刷

昭和六十年 四月一日 発行

発行者 旭村教育委員会

編集者 ふるさと旭編集委員会

印刷所 大村印刷株式会社

(1985)

